

伊良原ダム関係埋蔵文化財調査報告－3－

伊 良 原 III

下伊良原塚本遺跡

福岡県文化財調査報告書 第 232 集

2012

九州歴史資料館

伊良原ダム関係埋蔵文化財調査報告－3－

伊 良 原 Ⅲ

下伊良原塚本遺跡

福岡県文化財調査報告書 第232集

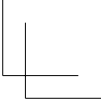
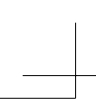




1 遺跡遠景



2 遺跡全景





1 塚上石塔群



2 出土遺物



序

福岡県教育委員会では、伊良原ダム建設事業に伴い、祓川上流の伊良原地区において埋蔵文化財の発掘調査を実施しております。これまでの発掘調査により、縄文時代や中世の多彩な遺構・遺物が確認されてきました。今回の発掘調査でも、縄文時代の生活や中世の信仰の一端をみることができる成果が得られました。

伊良原の地は深い山中ではありますが、縄文時代においては豊かな自然の恵みを活かした生活の様子を、また中世においては山岳信仰の盛んな地域における当地の重要性を物語るものであります。

本報告書が教育、学術研究とともに、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書の作成にいたる間には、関係諸機関や地元をはじめ多くの方々にご協力・ご助言をいただきました。ここに、深く感謝いたします。

平成 24 年 3 月 31 日

九州歴史資料館長 西 谷 正

例 言

- 1 本書は、県営祓川流域総合開発事業（伊良原ダム建設事業）に伴い、平成 20 年度に福岡県教育委員会が実施した、下伊良原塚本遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、福岡県県土整備部河川開発課の執行委任を受け、福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。報告書作成は福岡県県土整備部河川開発課の執行委任を受け、九州歴史資料館が実施した。
- 3 本書に掲載した遺構写真の撮影は、調査担当者が行い、ラジコンヘリによる空中写真は（株）九州航空に委託して行った。遺物写真の撮影は、九州歴史資料館において北岡伸一が行った。
- 4 本書に掲載した遺構実測図は、発掘調査作業員の協力の下、調査担当者が作成した。
- 5 出土遺物の水洗・復元・実測・浄書作業は九州歴史資料館にて実施した。
- 6 出土遺物および図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。
- 7 本書に使用した地形図は、国土交通省国土地理院発行の 1/50,000 地形図「田川」を改変したもの、および伊良原ダム事務所作成の 1/2,500 地形図を改変したものである。
- 8 本書の執筆・編集は岸本圭が行った。

本文目次

I はじめに	1
1 調査に至る経過	1
2 平成 20 年度の協議経過	2
3 調査の経過	3
4 調査の体制	4
II 地理的・歴史的環境	5
III 調査の記録	9
1 遺跡の概要	9
2 既往の調査	9
3 塚の調査	11
4 中世の遺構の調査	16
5 縄文時代の遺構の調査	20
IV おわりに	29

図版目次

巻頭図版 1	1 遺跡遠景	2 遺跡全景
巻頭図版 2	1 塚上石塔群	2 出土遺物
図版 1	1 遺跡遠景（西上空から）	2 遺跡遠景（東上空から）
図版 2	1 遺跡全景（北上空から）	2 遺跡全景（南上空から）
図版 3	1 遺跡全景（東、祓川右岸から）	2 遺跡調査前全景（西から）
	3 遺跡全景（昭和 50 年）	
図版 4	1 遺跡全景（上空から、左下が北）	2 塚上地山検出状況（北東から）
図版 5	1 塚西トレンチ（北西から）	2 塚北トレンチ（北から）
	3 塚東トレンチ（南東から）	4 塚南トレンチ（南から）
図版 6	1 塚上石塔群（東から）	2 塚上石塔群
	3 出土石塔①	
図版 7	出土石塔②	
図版 8	1 上層遺構検出状況（北西から）	2 上層遺構検出状況（北から）
	3 上層遺構検出状況（東から）	
図版 9	1 包含層堆積状況（B－B' 断面）	2 下層調査区全景（東から）
	3 下層調査区 2 区（北から）	
図版 10	出土遺物①	
図版 11	出土遺物②	
図版 12	1 ピット青磁出土状況	出土遺物③
図版 13	出土遺物④	
図版 14	出土遺物⑤	
図版 15	出土遺物⑥	
図版 16	出土遺物⑦	

挿図目次

第 1 図	みやこ町の位置	5
第 2 図	周辺遺跡分布図 (1/50,000)	6
第 3 図	下伊良原塚本遺跡周辺地形図 (1/5,000).....	7
第 4 図	塚上石塔群実測図 (1/40)	9
第 5 図	遺構配置図 (1/300)	10
第 6 図	塚断面図 (1/150)	11
第 7 図	出土石塔実測図① (1/4).....	12
第 8 図	出土石塔実測図② (1/4).....	13
第 9 図	包含層土層図① (1/60)	14
第 10 図	中世包含層出土遺物実測図① (1/3).....	15
第 11 図	中世包含層出土遺物実測図② (1/3).....	16
第 12 図	中世包含層出土遺物実測図③ (1/3).....	17
第 13 図	中世包含層出土遺物実測図④ (1/3).....	18
第 14 図	上層ピット出土遺物実測図 (1/3).....	19
第 15 図	包含層土層図② (1/60)	20
第 16 図	下層調査区位置図 (1/400)	21
第 17 図	下層調査区出土遺物垂直分布図 (1/60)	22
第 18 図	下層調査区出土遺物平面分布図 (早期) (1/80)	22
第 19 図	下層調査区出土遺物平面分布図 (後期) (1/80)	23
第 20 図	下層出土遺物実測図① (1/3).....	24
第 21 図	下層出土遺物実測図② (1/3).....	25
第 22 図	下層出土遺物実測図③ (1/3).....	26
第 23 図	出土石器実測図① (2/3).....	27
第 24 図	出土石器実測図② (2/3).....	28
第 25 図	出土石器実測図③ (1/3、27・28 は 1/2)	29

I はじめに

1 調査に至る経緯

伊良原ダムは、二級河川祓川の上流、福岡県京都郡みやこ町犀川下伊良原地先に建設される多目的ダムであり、祓川総合開発事業の一環をなすものである。重力式コンクリートダムで、総貯水容量 28,700,000m³ を有し、洪水調節、流水の正常な機能の維持及び水道用水の供給を目的とするものである。

祓川流域は、瀬戸内海型の気候を示し、梅雨期・台風期に降雨量多く、特に上流の山間部の降雨量が多い。急流な河川であるため、古くからたびたび洪水を起こしており、近年では昭和 55 年の豪雨により多くの被害を出している。その一方で、下流域の市街地では、しばしば深刻な水不足に見舞われており、新たな水源の確保が強く望まれていた。こうしたことから、洪水を調節し、水道用水の開発を行うとともに、既得取水の安定化及び河川環境の保全等のための流量の確保を目的として伊良原ダムの建設が計画された。

ダム建設の計画は古く、昭和 36(1961)年にはすでに予備調査に着手され、昭和 49 (1974)年度には実施計画調査も採択されたが、建設事業が採択され田川地及び京築地区水道企業団と基本協定が締結されたのは平成 2(1990)年度になってからのことである。

文化財に関する協議は、平成 6(1994)年度、地元地権者 5 団体と建設に関する基本協定書の締結を待って開始された。福岡県土木部（現県土整備部）河川開発課、福岡県行橋土木事務所伊良原ダム出張所（現伊良原ダム事務所）、福岡県教育庁指導第二部文化課（現総務部文化財保護課）、同京築教育事務所等の協議の中で、埋蔵文化財調査については用地買収が終了し民家移転後に本格的に開始すること、移転地については用地買収後に先行して調査を実施すること、民俗文化財については移転前に実施する必要があること等が合意され、福岡県教育委員会では平成 7(1995)年度から平成 10(1998)年度の 4 カ年にわたって民俗文化財の調査を実施、平成 11(1999)年 3 月に調査報告書を刊行した（『伊良原』福岡県文化財調査報告書第 143 集）。埋蔵文化財調査に関しては、平成 10(1998)年 9 月から試掘調査が開始され、平成 18(2006)年度より本発掘調査に取り組まれた。平成 23 年度までの本発掘調査は下記の通りである。

平成 18 年度	下伊良原中ノ坪遺跡 下伊良原原田ノ谷遺跡 下伊良原寺ノ谷遺跡 上伊良原川上遺跡 上伊良原下ノ段遺跡
平成 19 年度	上伊良原榎遺跡 上高屋台ノ原遺跡 1 次
平成 20 年度	下伊良原塚本遺跡 上高屋台ノ原遺跡 2 次
平成 21 年度	上高屋台ノ原遺跡 3 次
平成 22 年度	上伊良原マトコロ遺跡
平成 23 年度	下伊良原フラノ遺跡 下伊良原東向川原遺跡



調査風景

2 平成 20 年度の協議経過

今回報告を行う下伊良原塚本遺跡は平成 20 年度に本発掘調査を実施したものであるが、本発掘調査以外の協議・調査の経過を整理しておきたい。平成 20 年度の伊良原ダム事務所との文化財に関する協議は年度当初の 4 月から実施された。ダム事務所と文化財保護課との間で連絡・連携不足がしばしばみられたことから、両者の協議は月に 1 度のペースで定期的に実施することとした。

まず 4 月 14 日に祓川左岸、付替国道 496 号線の横瀬地区から西の塚地区にかけて踏査を行い、試掘調査対象地を明確にした。試掘調査の必要とした箇所について、一部を 5 月 7 日に調査したが、文化財は確認されていない。5 月 9 日には付替国道 496 号線の西の塚地区から釜の河内地区と蔵持地区の踏査を実施した。蔵持地区では道路脇に積み石の塚を確認したが、5 月 26 日の再踏査でみやこ町教育委員会の教示により後世のものと判断されたため調査対象から外した。5 月 12 日には祓川右岸の付替国道 496 号線の上伊良原地区と下伊良原地区の踏査を実施し、上高木神社周辺等で文化財の存在する可能性が高い地域を確認した。また同日の工事用道路 2 号関連蔵持地区の踏査で、蔵持山への参道となる石畳を確認したが、工事着工が近いため発掘調査も早急に着手することが求められた。5 月 27 日には B 代替地の共同墓地予定地および付替町道 3 号の踏査を実施した。前者については 8 月 20 日に試掘調査を実施し、文化財は確認されていない。6 月 16 日には西の塚地区家屋解体に伴う搬出道路工事に先立って試掘調査を実施した。ピットを確認したが、仮設道工事にあたっては影響がないと判断され、後日当該地の広域な確認調査が必要であるとした。

7 月 17 日からは、本調査とあわせて石塔類の扱いに関する協議を開始した。無縁墓地の改葬や補償の関係から、五輪塔や板碑等の文化財として記録すべきものについて調整を行った。これらの記録作業は平成 21 年度に本格的に実施することとした。

8 月 8 日にはみやこ町役場伊良原支所前の国道拡幅部分について試掘調査を実施した。狭小なこともあり文化財は確認されなかったが、安定した地盤であり、周辺に文化財が存在するものと想定された。

下伊良原塚本遺跡の調査が終了した 10 月 30 日には、県庁にて本年度の残りとは平成 21 年度の調査予定に関して協議を行った。平成 20 年度調査予定とした工事用道路 2 号と現国道 496 号線との取付け部にある石畳については樹木伐採後の対応としたが、伐採時期の関係から調査は平成 21 年度に実施することとした（上高屋台ノ原遺跡第 3 次調査）。平成 20 年度については、県道改良事業等がすでに予定として組まれていたため、本調査については下伊良原塚本遺跡および上高屋台ノ原遺跡（第 2 次調査）の二遺跡となった。なお、上高屋台ノ原遺跡については平成 22 年度に『伊良原Ⅱ』（福岡県文化財調査報告書第 229 集）として刊行されている。



調査風景

3 調査の経過

平成 20 年度の文化財調査が必要な緊急性が高い場所として、B 代替地沈砂池造成地（下伊良原塚本遺跡）と工事用道路 2 号建設予定地（上高屋台ノ原遺跡）とが挙げられた。前者は 10 月から工事に着工したいとのことであった。調査可能な地点は他にもあったが、同年度に県営築城団地改築に係る発掘調査等が既にスケジュールに組み込まれており、本発掘調査は緊急を要する地点に限定するものとした。

下伊良原塚本遺跡は 6 月 10 日から測量を開始した。上高屋台ノ原遺跡の調査を並行して行うため、当初は京築教育事務所担当の岸本と文化財保護課下原が調査を担当することとした。上高屋台ノ原遺跡の調査は 6 月 12 日から実施し、文化財保護課小田と下原が担当した。上高屋台ノ原遺跡の調査は 7 月 29 日に終了したが、下原は 7 月 22 日から香春町にて国道 322 号線バイパス建設に係る宮原金山遺跡の発掘調査を担当することとなった。また岸本は 9 月 9 日から築上町にて県営築城団地改築に係る築城千代遺跡の発掘調査を担当することとなり、その後の下伊良原塚本遺跡調査は文化財保護課木下が担当することとなった。

下伊良原塚本遺跡については、既に周知の埋蔵文化財包蔵地とされていたが、平成 19 年の 8 月 8 日に確認調査が実施され、塚周辺に関して調査が必要な範囲が確定された。塚とその周辺の地形測量後は表土を重機を用いて除去することとした。祓川に架かる新橋という狭小な橋が重量面で重機が渡れないと判断されたため、南側の道路との間の谷を渡れるよう仮設橋梁を設置する計画をした。しかしダム事務所との 6 月 16 日の協議で仮設橋が設置できないとされ、小形重機を複数台用いることで対応することとした。重機の数揃えたとはいえ、作業効率がどうしても悪くなり苦慮した。

7 月 9 日から作業員とともに掘削作業を開始した。山間部とはいえ、比較的風が通らない地形であり、夏の暑さには閉口した。7 月 11 日に包含層の形状にあわせてトレンチ（A トレンチ）を設定、南側を 1 区とし、包含層掘削を開始した。中世の土師器小片が多く出土するが、石鏃や縄文土器が含まれることから下層に遺構の存在を予感させるものがあった。

7 月 17 日に調査区に杭打ちを実施した。公共座標・レベルともに国道 496 号線沿いから移動することとなり手間がかかった。塚の精査に備えて塚の軸を設定し、それに沿って包含層に土層観察用のベルトを設定、さらにそれに直行して北側にベルトを設定した。7 月 22 日に包含層 1 区掘削を終え、包含層 2 区の掘削を開始。作業員を増強し、早期終了を目指した。7 月 29 日に包含層 2 区の掘削が終了し、包含層 3 区に着手した。包含層 3 区は浅く、7 月 31 日には包含層 4 区を並行して掘削することとし、8 月 8 日に 3・4 区ともに終了した。8 月 18 日には塚の調査に着手した。頂部平坦面を 4 分し、斜面についてはトレンチを設定した。表土直下で地山を検出し、盛土によるものではないことが確認され、遺物も皆無であった。8 月 25 日に包含層トレンチ部に縄文時代の堆積の調査に着手した。上層遺



調査風景

構面の図面作成・写真撮影をすすめ、9月4日にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。9月5日よりAトレンチに沿って縄文時代包含層の掘削を開始した。9月25日まで縄文時代包含層の掘削を行い、9月26日は調査区間のベルト除去、ベルト下の遺構掘削を実施した。図面作成等を10月8日まで実施。その後、安全対策の埋め戻し等を行った。調査担当が入れ替わる等の問題もあったが、11月27日には全ての作業を終了することができた。

4 調査の体制

発掘調査は福岡県教育委員会が事業主体となり、整理作業・報告書作成については平成23年度の機構改変により九州歴史資料館が事業主体となった。平成20年度の発掘調査および平成23年度の整理作業の関係者は以下のとおりである。

福岡県教育委員会

	平成20年度
総括	
教育長	森山 良一
教育次長	檜崎洋二郎
総務部長	荒巻 俊彦
文化財保護課長	磯村 幸男
副課長	池邊 元明
参事	新原 正典
参事（兼課長技術補佐）	小池 史哲
課長補佐	前原 俊史

庶務

管理係長	富永 育夫
管理係	小宮 辰之

調査

調査第一係長	小田 和利
調査第一係	木下 修（調査）
	岸本 圭（調査）
	下原 幸裕（調査）

九州歴史資料館

	平成23年度
総括	
館長	西谷 正
副館長	南里 正美
総務室長	圓城寺紀子
文化財調査室長	飛野 博文

庶務

総務室	近藤 一崇
-----	-------

整理報告

保存管理班長	加藤 和歳
参事補佐	小池 史哲

文化財保護課

企画係	岸本 圭（整理・報告）
-----	-------------

なお、発掘調査および整理・報告書作成作業にあたり、みやこ町教育委員会をはじめとして御理解・御協力をいただいた関係各位に厚く感謝申し上げます。

Ⅱ 地理的・歴史的環境

遺跡が所在する京都郡みやこ町は、福岡県の北東部に位置する。平成 18（2006）年に京都郡勝山町・豊津町・犀川町の三町が合併して発足した町であり、本遺跡は犀川町にあたる。総面積は 151.28km²であるが、西部から南部にかけて山地がひろがり、平野は北西部が中心となる。

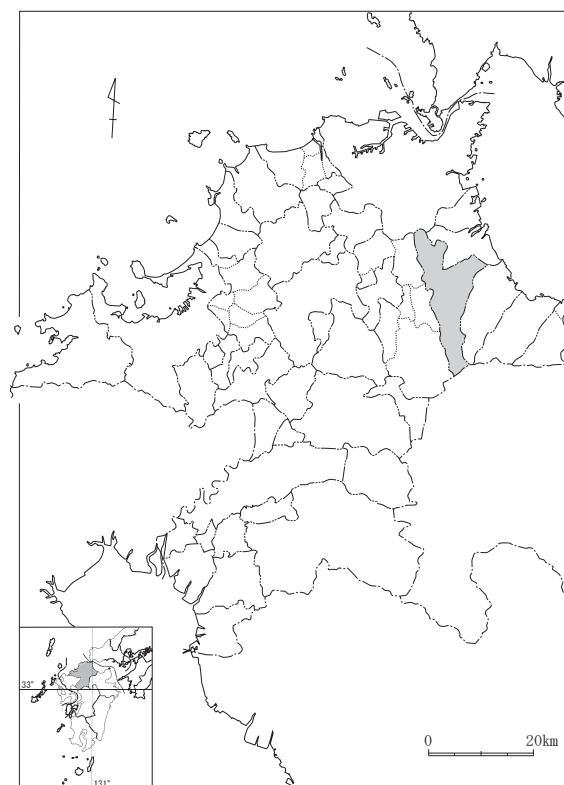
福岡県は旧国でいえば筑前・筑後・豊前の三国からなるが、福岡県北東部の周防灘に面する当地域は豊前国にあたる。また、福岡県を地理的に区分すれば、本地域は京築と称されるが、これは京都郡と築上郡を併せた表記である。

京築地域は、東は周防灘に面し、南は英彦山（1199m）を主峰とする英彦山山系により大分県と画される。西は英彦山山系鷹ノ巣山（979m）から北へ伸びる標高 500 ～ 600m 程度の山系により筑豊地域と区分される。京築地域の地形は、英彦山山系から周防灘に向かって八手状に長く伸びる丘陵と、その間の河川に沿う細長い谷が繰り返す点を特色としており、平野部は周防灘に面する比較的狭い範囲に限られる。その中で、かつては入海であったと考えられる京都平野と称される現行橋市周辺は、比較的広い平野面積を誇る。

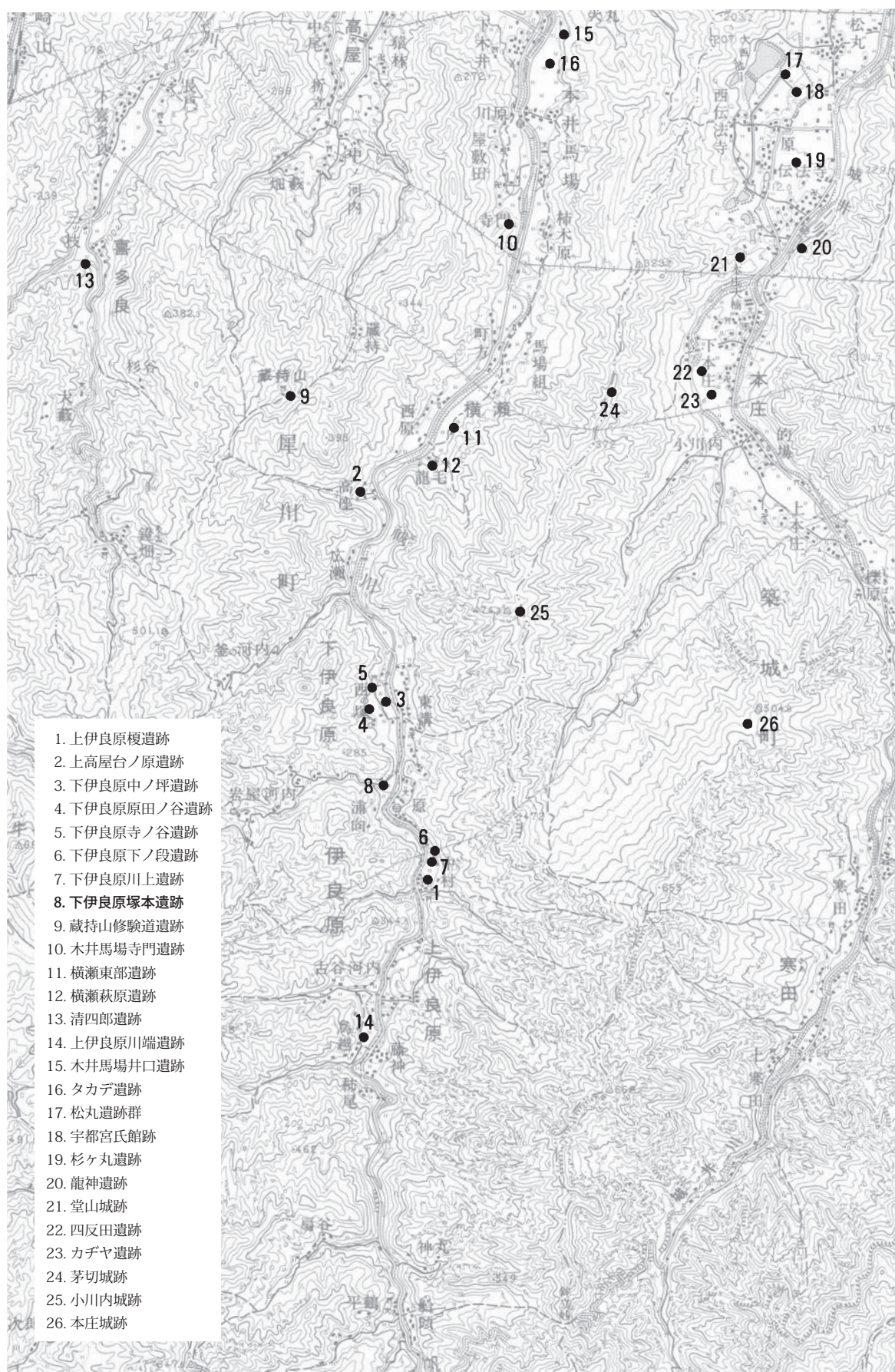
今回の事業地である伊良原地域は、祓川に沿う地域である。祓川流域は、上記の京築地域に併行して存在する谷の中でも最も流域面積が広く、かつ現在国道 496 号線が走ることが示すように山間部における主要な交通ルートであった。このことは、歴史的環境に対しても影響することは容易に想像できることであり、縄文時代における集落の展開や中世の山岳信仰に伴う発展の基盤となったものと考えられる。

伊良原地域の埋蔵文化財は、縄文時代及び中世を主体とするものであり、弥生時代から奈良時代にかけては遺物が散見される程度である。祓川上流域となるこの地域は可耕地の少なさが弥生時代以降の遺跡の少なさと関連するものとみられ、本地域から 6km 程下流、祓川中流域の木井馬場地域になるとある程度の面積の平野が展開し、木井馬場井口遺跡やタカデ遺跡といった弥生時代や古墳時代の集落が現れる。

縄文時代に関しては、京築地域にみられる細長い谷部には、豊前市中村石丸遺跡や山崎遺跡に代表されるように集落が展開していることが想定されてきた。この伊良原地域は、かつての遺跡分布調査においてはその状況が明らかにはされていなかったが、今回の伊良原ダム建設に先立つ発掘調査により、その多彩な状況が明らかになってきた。上伊良原榎遺跡では、早期初



第 1 図 みやこ町の位置



第2図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)



第 3 図 下伊良原塚本遺跡周辺地形図 (1/5,000)

頭の柏原式土器が多量に出土した点は特筆される。また上高屋台ノ原遺跡では押型文土器が、下伊良原原田ノ谷遺跡では轟式土器がまとまって出土している。これらの遺跡はアカホヤ火山灰由来の厚い堆積土の下層にて検出されるものが多く、これまで発見されることが少なかった理由の一つとも言えよう。

また古代から中世においては山岳信仰の発展と密接な関係が想定される。出羽三山・紀州熊野山と並んで日本の三大修験道の一つと言われる英彦山豊前坊を中心とした豊前六峯の分布域に含まれ、その一つ蔵持山宝船寺の関連となる蔵持山修験道遺跡は下伊良原塚本遺跡の北約 3 kmの地にある。英彦山や求菩提山を繋ぐルート上にも位置する伊良原地域には下伊良原寺ノ谷遺跡や上伊良原榎遺跡で検出された掘立柱建物群をはじめとする調査成果からもその繁栄が示されており、また伊良原地域各所に所在する中世の石塔群もまたそれを裏付けるものである。

参考文献

- 福岡県教育委員会 1999 『伊良原 - 民俗文化財の調査 -』 福岡県文化財調査報告書第 143 集
福岡県教育委員会 2009 『伊良原Ⅰ』 福岡県文化財調査報告書第 222 集
福岡県教育委員会 2010 『伊良原Ⅱ』 福岡県文化財調査報告書第 229 集
犀川町誌編集委員会 1994 『犀川町誌』

Ⅲ 調査の記録

1 遺跡の概要

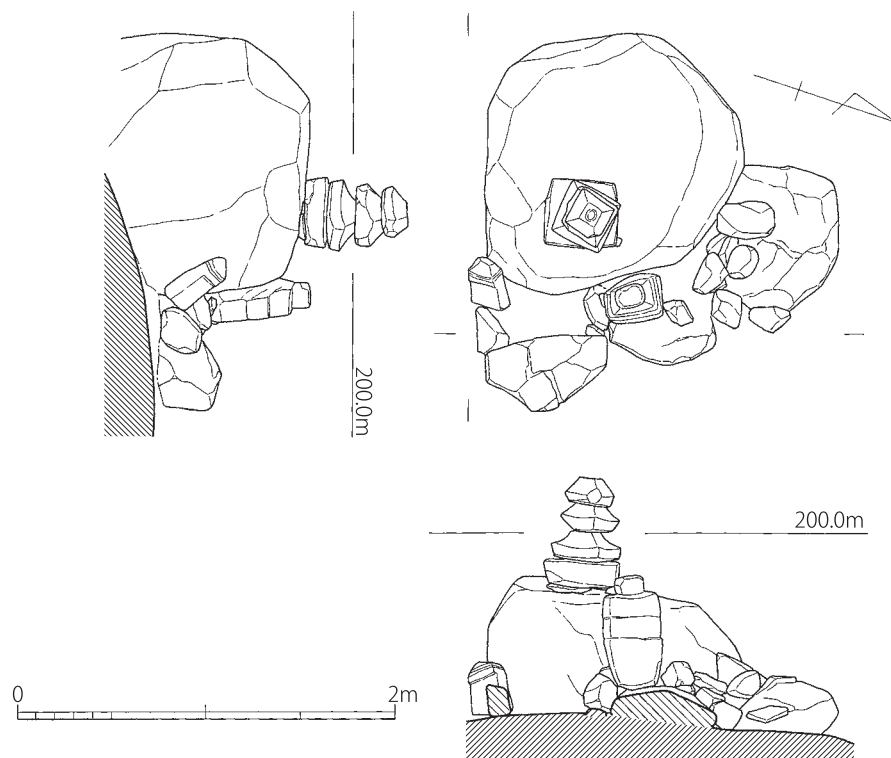
下伊良原塚本遺跡は、周辺地形図（第3図）をみてわかるとおり、祓川左岸の丘陵裾地に位置する。祓川に並行して南北に伸びる主稜線から東へ派生する尾根の先端に位置するもので、祓川との間の狭い棚田の中に立地し、遺跡の西は急傾斜地となる。

遺跡名にもあるとおり、遺跡には塚状の高まり（以下、塚と記述する）の存在が大きな特徴である。塚は南北約20m、東西約22mの規模で、周辺は水田造成により直線的に削られ、不整形な多角形を呈する。塚の上面は、南北約10m、東西約13mの隅丸方形の平坦面をなす。塚の東側裾は一段下がった水田面となっており、比高差が大きく約5.7mを測る。西側の包含層が広がる面との比高差は約3.2mである。塚の南側は狭い水田を挟んで祓川の支流である岩屋河内川に向かって急激に落ちる。塚の四周は急傾斜であり、何かにつかまらないとうまく登れない程度である。塚上には平坦面南西隅の巨石上とその周辺に石塔群がある（第4図）。

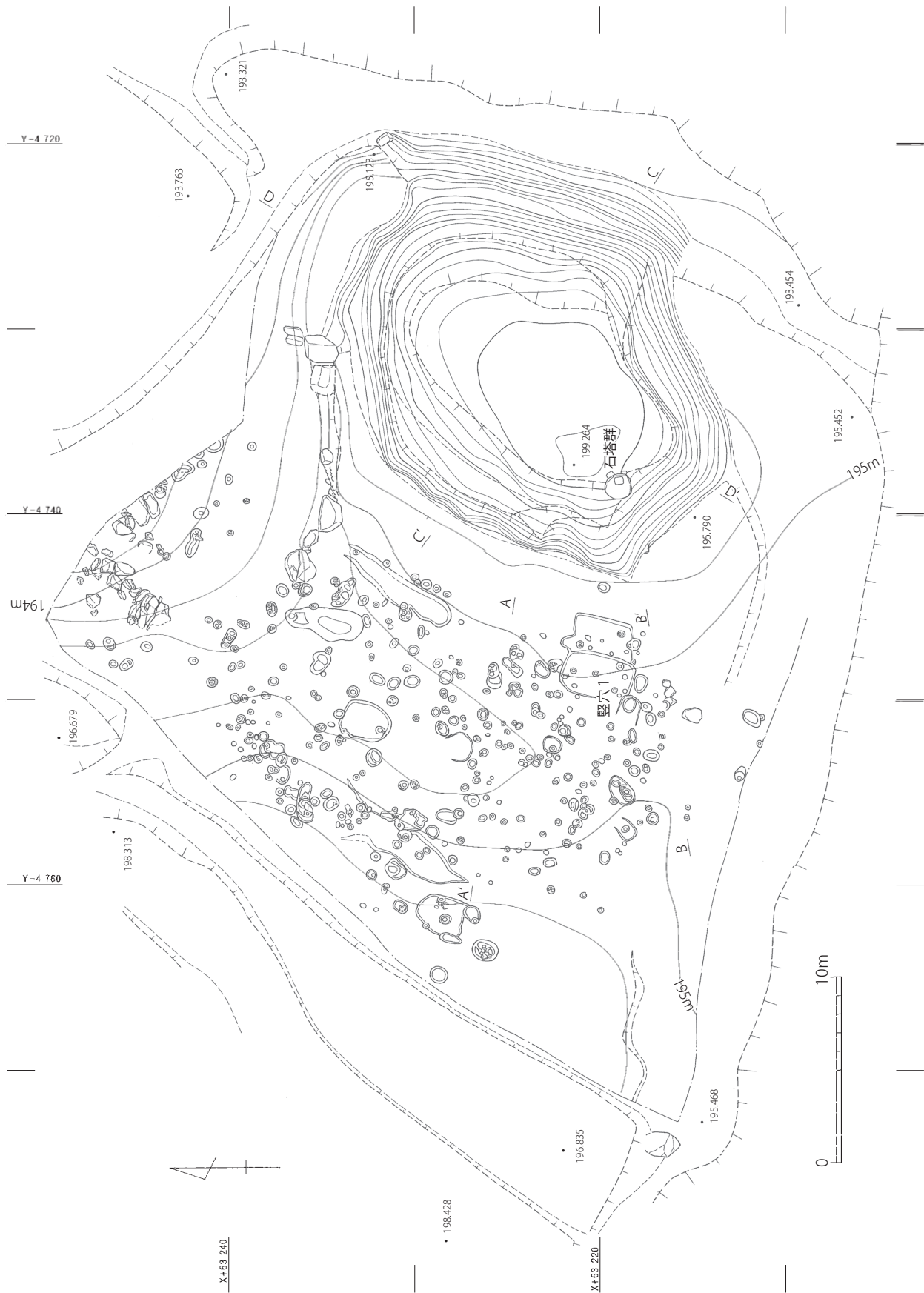
2 既往の調査

下伊良原塚本遺跡については、古墳状の形態をなす塚が存在することから早い段階から既に文化財として認識されていたものとみられる。

昭和27（1952）年に編集された『伊良原村史』には、上伊良原に所在する「京塚」を記述する中で、「尚、塚本にも石のとびらのついた古墳があります。」と下伊良原塚本遺跡についてふれている。なお、この「石のとびら」については留意して調査を進めたが、後述するようにおそらく地山に含まれる巨石がこのように観察されたものと想定される。



第4図 塚上石塔群実測図（1/40）



第 5 図 遺構配置図 (1/300)

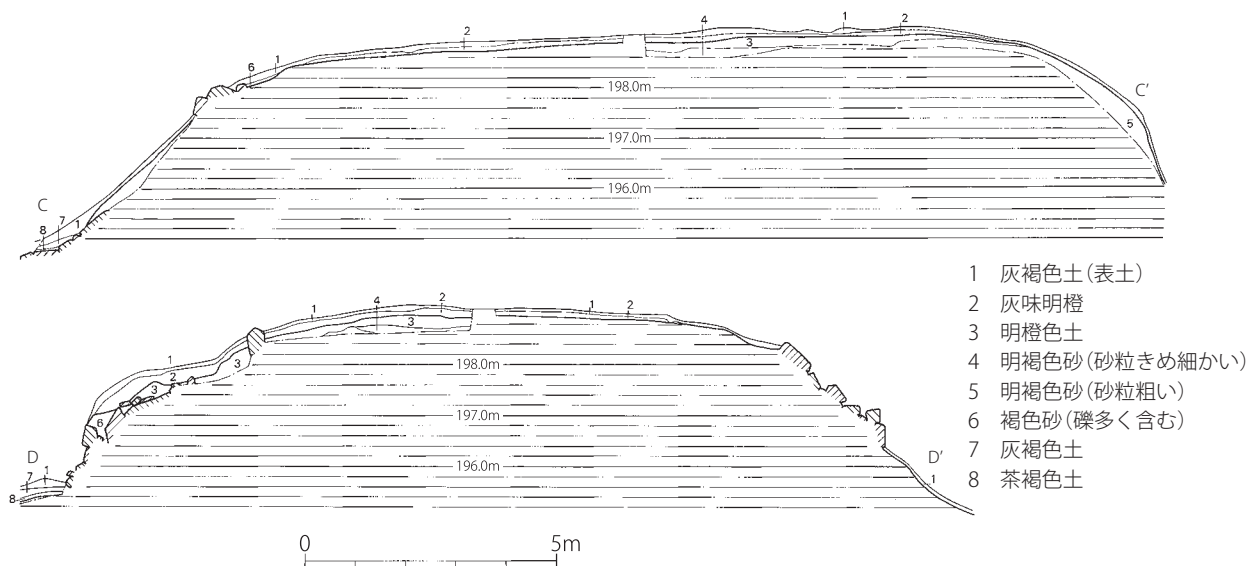
昭和 43（1968）年に文化財保護委員会から『全国遺跡地図（福岡県）』が刊行された。図への記入は西へずれているものの、「下伊良原遺跡：古墓」として登録されている遺跡が該当するとみられる。この段階で伊良原地区とその周辺で登録されているのは本遺跡のみであり、早い段階から認識されていることを物語る。その後、昭和 40 年代後半から県下一斉に埋蔵文化財の詳細分布調査がなされたが、京都郡については昭和 51（1976）年に分布図が刊行されている。その中で鎌倉～江戸時代の石塔として「塚ノ本遺跡」が登録されている。この時の調査カードには、上記内容とともに写真が添付されている（図版 3-3）が、この状況は今回の調査時とほとんど変わらないことが窺われる。

昭和 52 年には美夜古郷土史学校民俗調査班により『伊良原の民俗Ⅰ 石造遺物編』が刊行されている。昭和 51 年 4 月から約 1 年間、下伊良原地区の民俗調査が行われたもので、その一環として石造遺物の調査が行われた。この調査により 40 件の石造遺物が報告されているが、その中で、(30) 浦向・石塔群として、この下伊良原塚本遺跡が紹介されている。報文は下記の通りである。「岩屋河内橋を渡り、ゆるやかな坂道を登って行くと、谷川の北側に、小さな岡が、段々畑の中に、存在している。この岡の上に立つと、下伊良原の村が一望にみわたせる。岡の上は平坦になっており岡の南西隅に、高さ五七センチ、幅二五センチの一石五輪塔と、五輪塔の風輪のみ三個があった。三個とも、高さ一〇センチの地輪の上に、積み重ねてあった。」この記述によると、今回の調査の際に存在した板碑は記述がなく、掲載された写真では不鮮明なため存在ははっきりしない。ゆえに板碑についてはその後現在の位置に持ち込まれた可能性が考えられる。

3 塚の調査

塚の性格を把握するために、上面の平坦面は人力による表土除去を行うこととし、斜面については十字にトレンチを設定することとした。トレンチの方向は、既に水田面包含層に設定していた土層観察の方向を基礎に設定した。

塚の断面土層図は第 6 図のとおりである。塚の上面は表土直下で灰味を帯びた明橙色土と



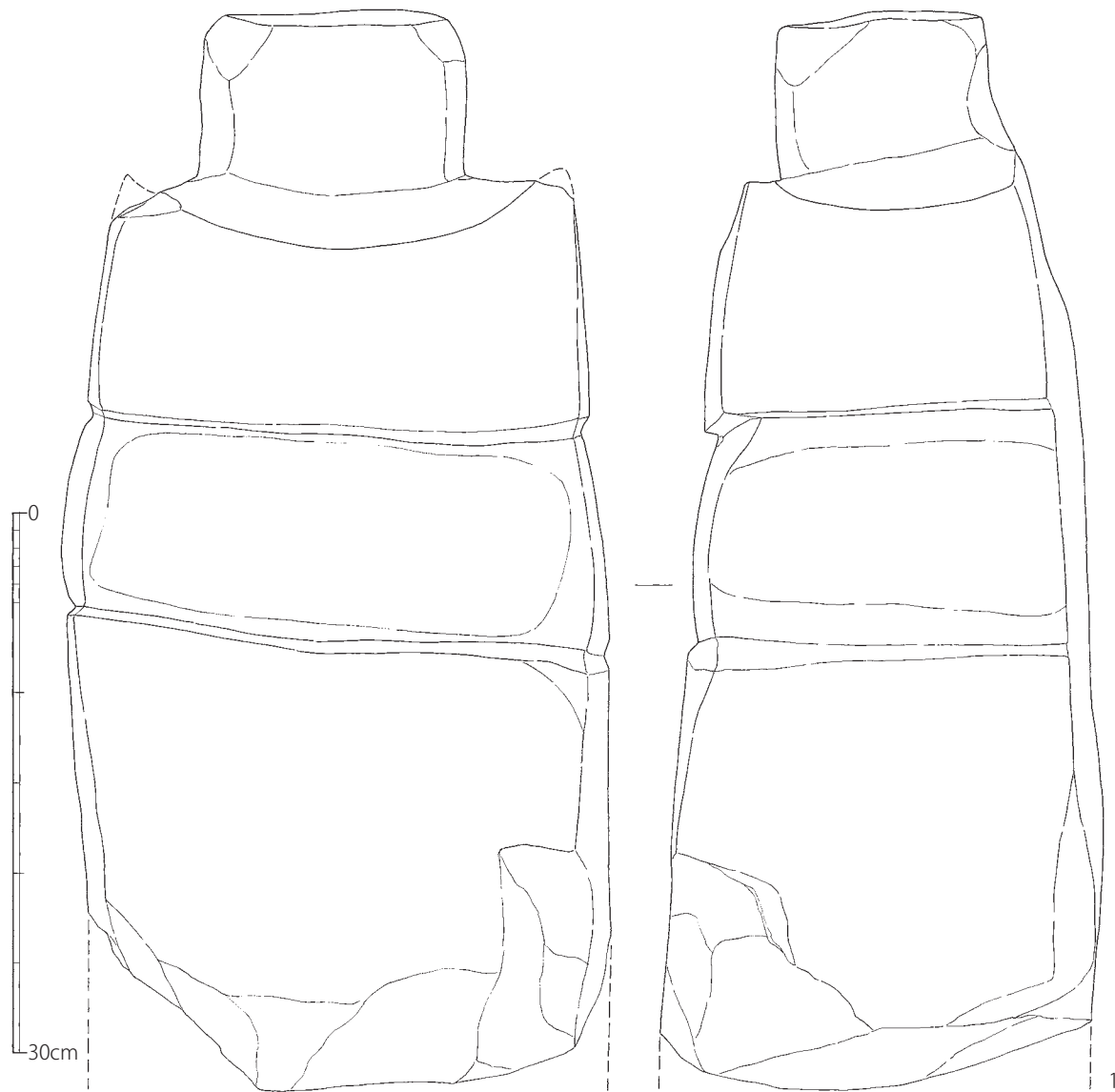
第 6 図 塚断面図 (1/150)

なり、その下層は明橙色土である。この明橙色土は地山と判断され、上層の灰味を帯びる層も幾分草木の影響を受けた地山と考えられた。念のため、サブトレンチを設定して深く下げてみたが、明褐色砂や風化した岩盤が検出される等、人為的な堆積ではないものと判断された。塚の上面はしまりのない埋土のピットが1基検出されたのみであり、このピットも樹木根もしくは動物の巣穴跡かとみられるものであった。

斜面のトレンチに関しても、表土・崩落土直下で地山ないし岩盤が検出された。

上面・斜面ともに出土遺物は近現代の陶磁器がわずかにみられるのみである。

石塔群は塚上の平坦面の南西隅、地山から突き出した形の巨岩上とその周辺に位置する（第4図）。岩上の一群は、岩上平坦面の東寄りに置かれ、五輪塔の地輪上に3つの火輪が重ねられる。地輪下には岩盤片が安定のため噛ませられる。この巨岩の塚上平坦面からみた正面に、一石五輪塔が置かれる。一石五輪塔は地山に含まれるとみられる岩石上に、巨岩に寄りかけて置かれ、その周囲には岩石片が寄せ集められている。その南側、巨岩の南東隅に板碑が置かれている。



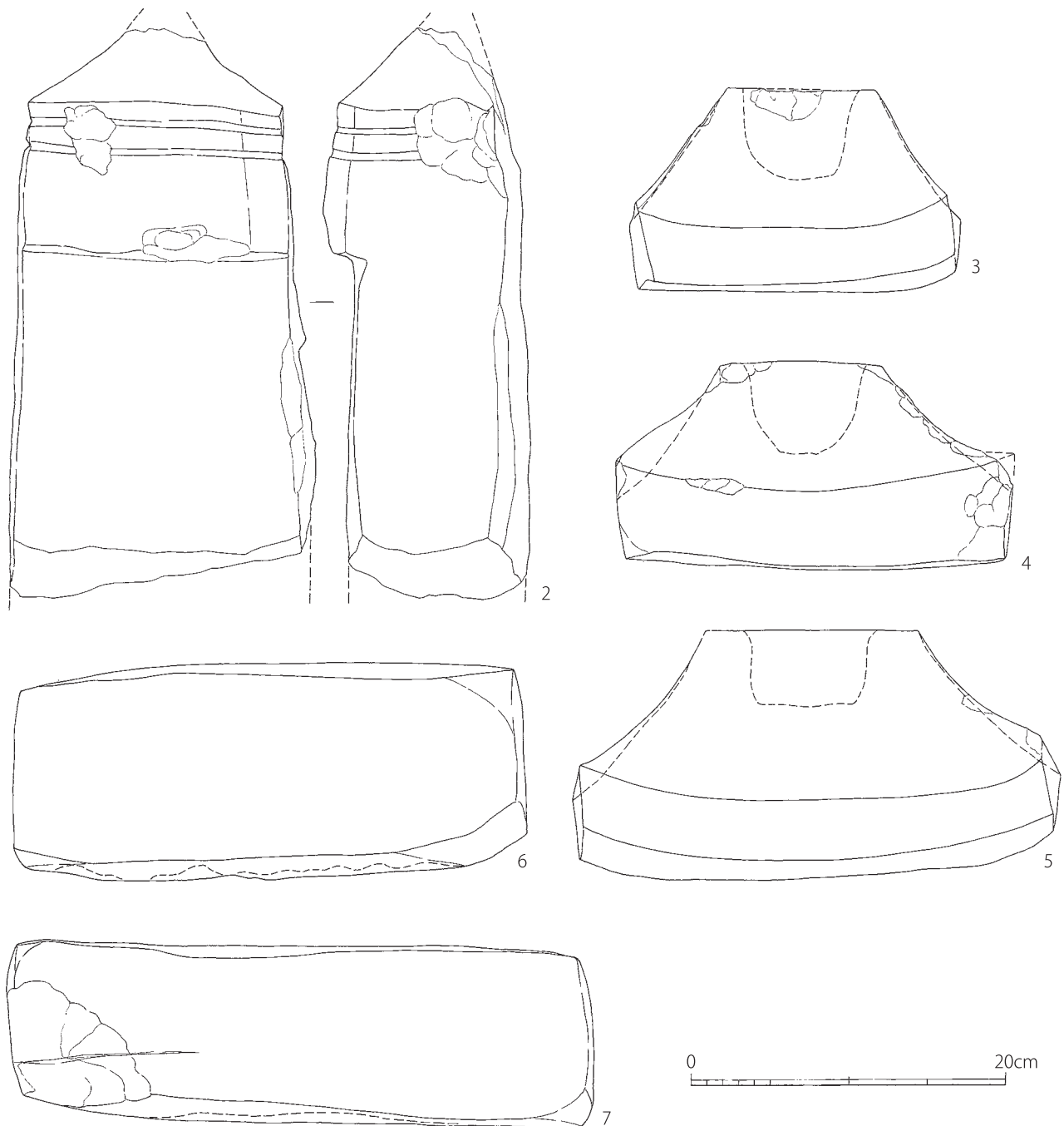
第7図 出土石塔実測図①（1/4）

石塔群周辺の精査では、石塔の設置に係る遺構は検出されなかった。

これらの調査の結果、塚は人為的な盛土はなく、また後述のように周辺に縄文時代の包含層が存在することからも塚状に成形されたものではないと判断される。上面には遺構は存在せず、塚上にある石塔群に関連するものは確認されなかった。石塔群が乗る巨石は地山に含まれる岩盤が露出したものであり、水田造成等で本来の位置から動かされた石塔が寄せられたものであろうと判断されるに至った。

石塔（図版6・7、第7・8図）

1は一石五輪塔。基部は欠損が多いものの本来の高さに近いものであろう。現況で高さ



第8図 出土石塔実測図②（1/4）

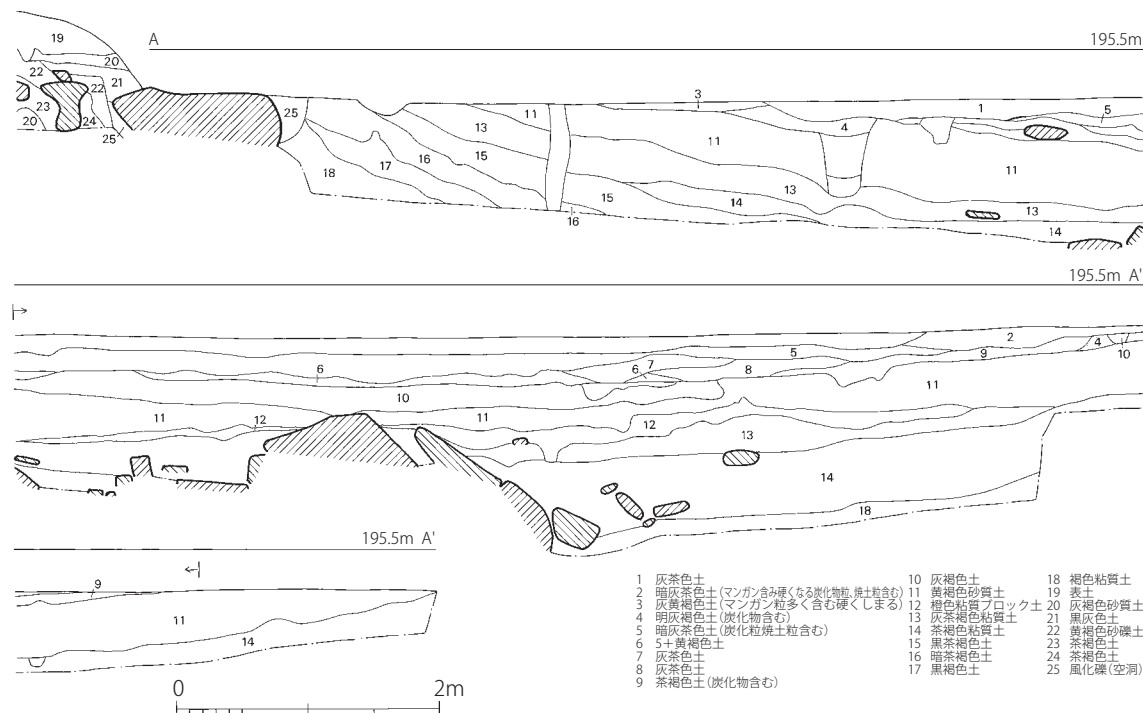
59.2cm、最大幅（水輪部）30.0cm、最大厚さ（地輪部）23.4cmを測る。裏面は平坦に整えるのみであり、水輪部を区分するような加工もない。空輪と風輪は区分せず一体の方形で表現される。火輪は前面端部をせり上げて表現するが、端部は欠損する。水輪は高さ11.0cmで扁平な方形に表現され、立体的に表現されない。

2は板碑。基部及び頂部は欠損する。上部前面及び側面に二条の圈線を刻む。額部は平坦につくるが、梵字等は確認されない。摩滅しているとは考えがたく、本来より刻まれていなかったものと考えられる。

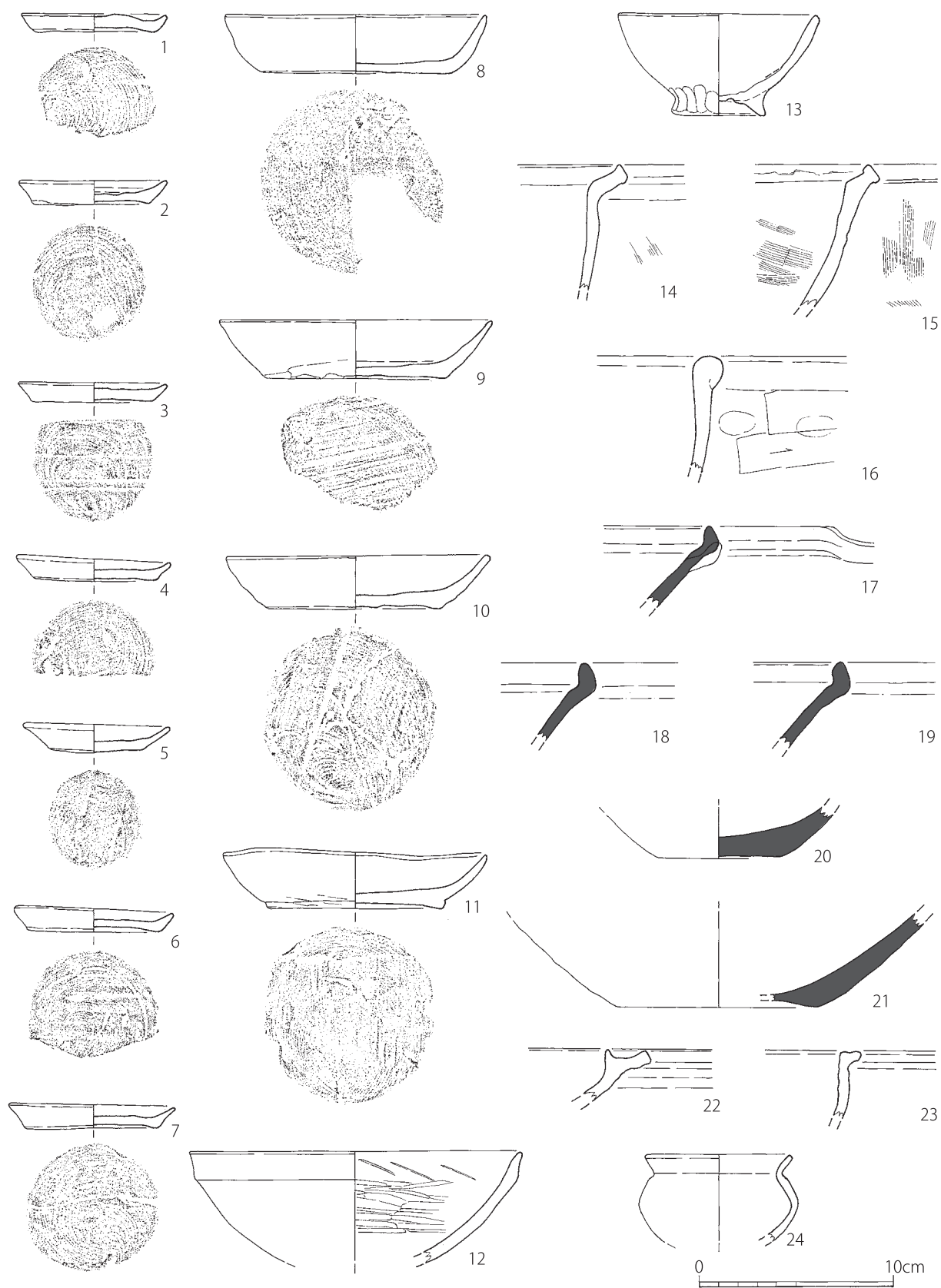
3～5は五輪塔の火輪。7の地輪上に、上からこの順番で巨石上に置かれていた。3は一辺20cm、高さ13cm。底面はほぼ平坦で端部は若干反る。屋根部はほぼ直線的に立ち上がる。風輪との接続する割り込みは平面円形。4は一辺24.5cm、高さ13cm。底面はほぼ平坦。風輪との接続する割り込みは平面方形。表面は風化するものの非常に平滑につくられる。5は一辺30cm、高さ16cmを測る。全体的に反りのついた形状をなす。平面形は四辺がやや膨らみをもつ形態。風化が少なく平滑なつくりである。風輪との接続する割り込みは平面方形。

6の五輪塔地輪は、塚上の石塔群に含まれるものではなく、塚西側の水田石垣中に転用されていたもので、表土除去中に確認した。一辺32.5cm、高さ13.5cm。底面は粗いケズリをそのまま残しているが、隅部のみ丁寧に加工し反った形状とする。

7は石塔群の火輪群の下に置かれていた五輪塔地輪。一辺37cm、高さ11.5cmで扁平な形状である。上面は平坦で、下面は中央部がやや窪む。水輪安定のため窪ませた可能性も残すが、丁寧に平坦に整形される面を上面と判断した。



第9図 包含層土層図① (1/60)



第 10 図 中世包含層出土遺物実測図① (1/3)

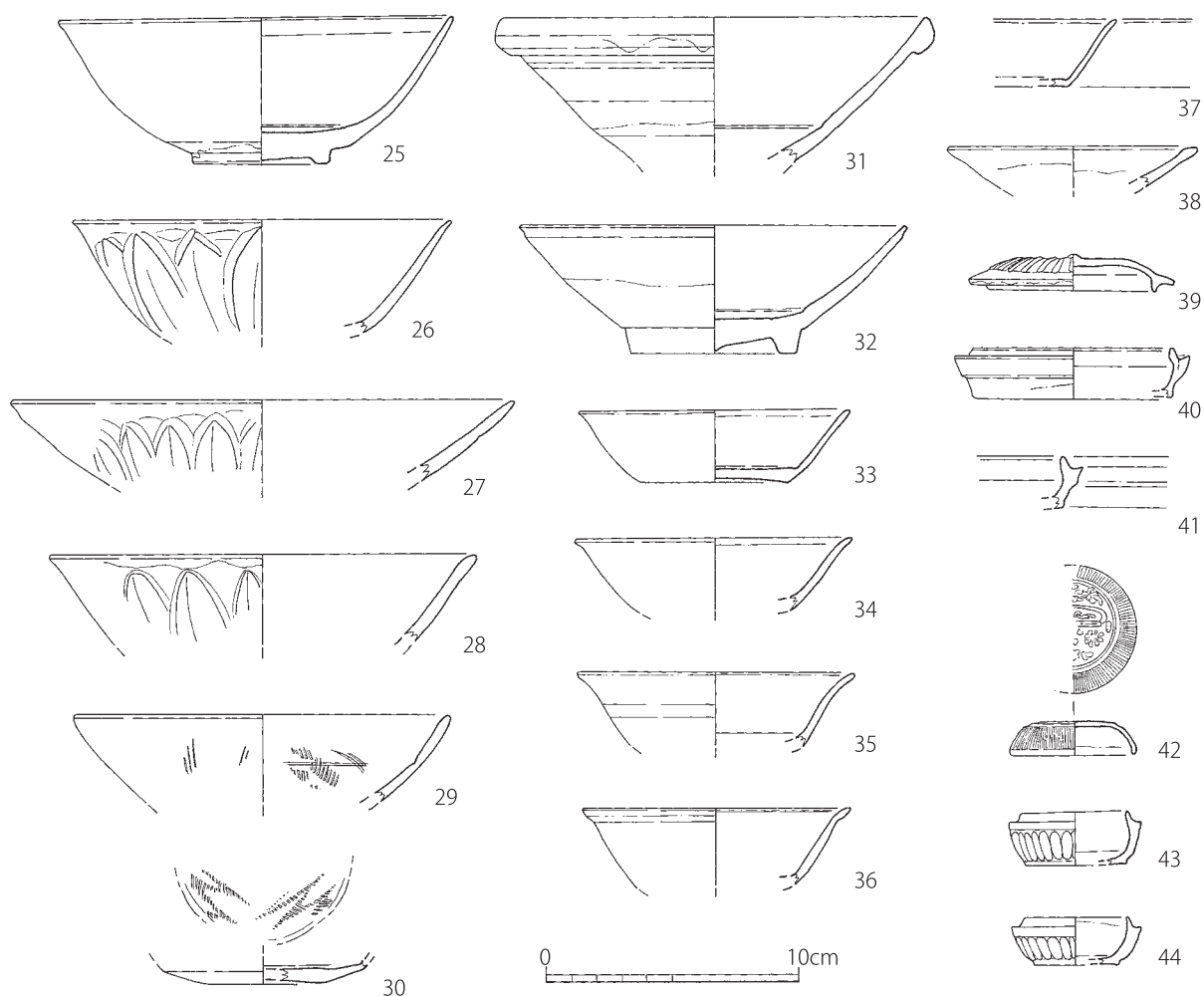
4 中世の遺構の調査

基本土層（第9図）

塚の西側を中心として耕作土直下において遺物包含層の広がりを確認した。調査区の西側は石垣が築かれた水田が上方にあり、比高差は約1m40cmある。したがって、水田造成時に調査区の西側は既に削平されており、調査においても耕作土直下で風化礫を含む地山が検出された。

第9図はAトレンチの下層縄文時代を含む土層図である。10及び11の黄褐色土（縄文時代後期の包含層）を遺構面とする中世の面があり、その上層1～9の灰茶色土を基本とする堆積が中世の遺物包含層である。この灰茶色土包含層は、塚の西～北西にかけて南北約30m、東西約14mの範囲で検出された。

包含層からは中世に位置づけられる土師器・須恵器・瓦器・磁器が出土した。ただし小片とになったものが多く、出土状況に意味をもたせることができるような事例はみられない。黄褐色土を遺構面としてピットを多数検出したが、掘立柱建物を復元できるような状況を呈していない。また土坑状の窪みも検出したが、遺構の肩・形状が判然とせず、包含層の凹凸程度のものと判断されたため、個別に取り上げてはいない。ただしピットからはある程度形になる土師器や青磁が出土する傾向にある。包含層の南東隅付近で、4m×2mの浅い竪穴遺構と径約1.2mの不整形の焼土・硬化面を検出したが、遺物がほとんど出土せず時期・性格ともに判断するこ



第11図 中世包含層出土遺物実測図②（1/3）

とができなかった。

中世包含層出土遺物（第 10～13 図）

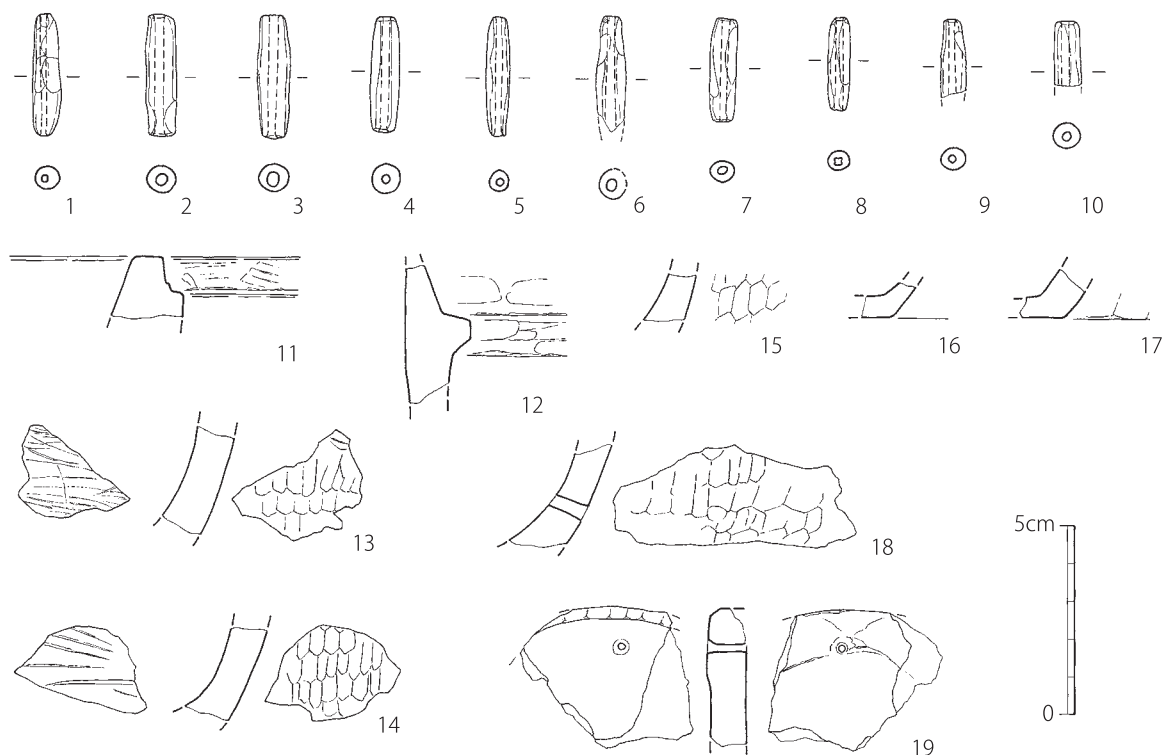
1～7 は土師器小皿。口径は約 8cm で揃う。口縁部は短く、扁平な形状である。底面にはいずれも糸切り痕を残し、3・5・6 には板圧痕がみられる。焼成はいずれも良好で、硬質である。歪んで口縁部が波打った形状となるものが多い。

8～11 は土師器杯。口径は約 13.5cm で揃う。口縁部は内湾気味に立ち上り、器高は約 3.0cm。底面にはいずれも糸切り痕を残し、8 を除き板圧痕がみられる。焼成はいずれも良好。

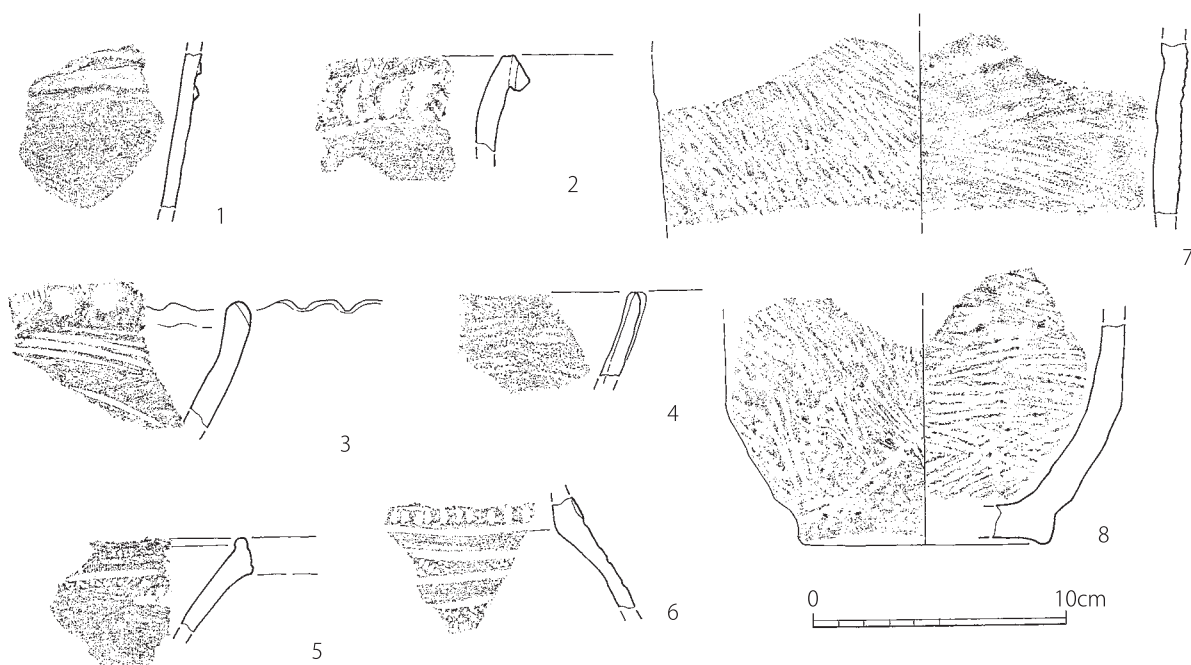
12 は土師質の椀。体部は内湾して立ち上り、口縁部は短く外反させるが、口縁部と体部との境には稜をもつ。外面は摩滅するが、内面にはミガキが認められる。胎土は精良。13 は土師器の椀で、半球形の体部で、指でつまみあげることにより高台を作り出す。ナデ調整により整形し、口縁部は明瞭なヨコナデを施さない。胎土には石英粒を多く含み、弥生土器に近い。14～16 は大形の土師器鉢。14・15 はく字形に外反する口縁部をもつもの。口縁端部内面は短く摘み上げるが、14 はシャープで、15 は丸みをもち調整も粗い。焼成は甘く、白黄色を呈する。摩滅が進むが、煮炊きによる影響があろう。16 は直立する体部に丸みをもって肥厚させる口縁部をもつもの。焼成は良く、硬質。煮炊きによるススの付着がみられる。

17～21 は須恵質の鉢。17～19 は口縁部で、17・18 には注口部を含む。大きく開く体部で、口縁部は短く直立させる。口縁部外面は丸みを有するが、自然釉により口縁帯を表現した形となる。色調等より 18・19 は同一個体の可能性がある。20・21 は底部。底面には糸切り痕を残す。内面は使用により摩滅が著しく、滑らかな器面となる。

22 は陶器播鉢で、焼き締めで硬質。大きく開く口縁部で、外端部を強く引き出し、内端部を上方に突出させる。23 は直立する体部で直角に折る口縁部を有する陶器。片口部かとみら



第 12 図 中世包含層出土遺物実測図③ (1/3)



第13図 中世包含層出土遺物実測図④ (1/3)

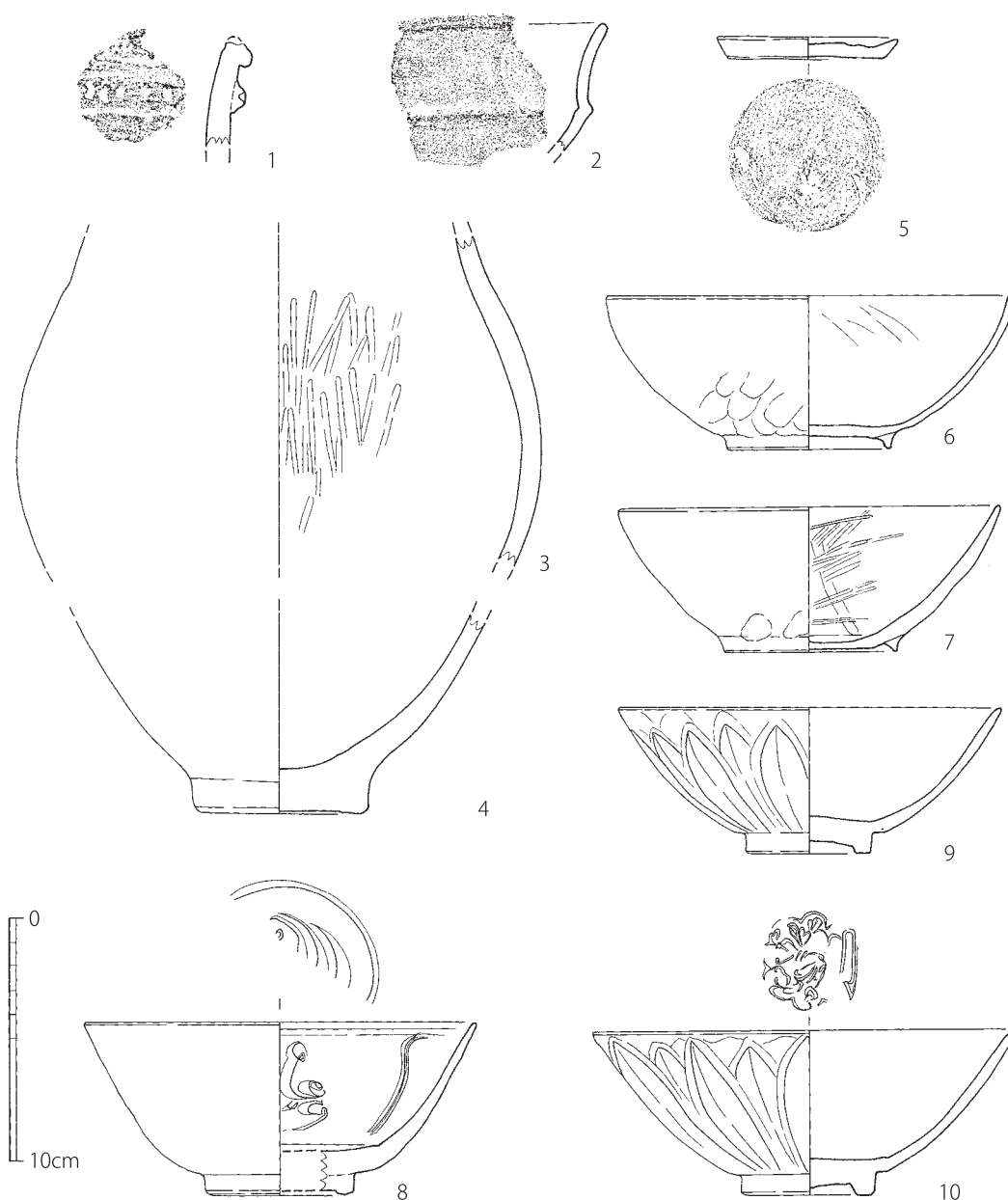
れる貼り付けの痕跡が外面に見られる。全面に鉄釉を施し、口縁部上面には砂目跡が残る。24は小形の壺形陶器。球形に近い胴部に、短く外反させる口縁部がつく。全面に鉄釉を施す。

25～30は青磁。25は無紋の碗で、外面はカキメ状の整形痕を残す。高台は露胎で、釉は光沢の少ない灰緑色を呈する。26～28は外面に鎬蓮弁文を描く碗。釉調は、26は透明度の高い緑灰色で、27・28は濁った緑灰色である。29は小形の碗で内外面に櫛描文を描く。

30は皿の底部。底面は露胎で、釉調は透明度の高い緑灰色。見込に櫛描文を描く。

31～44は白磁。31は直線的に広がる体部で玉縁口縁の碗。釉の発色は悪く、つやのない灰黄褐色を呈する。32は直線的に広がる体部で、口縁部は端部外面を窪ませるシンプルな形状。外面の施釉は約1/3で、見込は同心円に釉を剥ぎ、重ね焼きの痕跡を残す。釉調は黄灰色で、発色はあまり良くない。33～37は坏。33はわずかに上げ底の平坦な底部に直線的な体部が続く、口縁端部は外反させる。34～37は破片資料であるが、33と同様の形態となろう。釉の発色はいずれも概ね良好で、つやのある白灰色を呈するが、36はやや暗い釉調。いずれも口縁部内面の狭い幅で釉を剥ぎとる。38は小皿であろうか。大きさの割りに厚みがある。39は蓋で、身受けのかえりがつく。40のような大形の合子に伴うものでであろうか。低いドーム状の形態で、頂部に小突起をつくり、そこから放射状に菊花状の文様を浮き彫りで表現する。釉の発色は良く、かえりの外側は露胎である。40・41は大形の合子の身。底面の残存は悪いが、高さ2cmの低い扁平な形状と考えられる。短い蓋受けの立ち上りを持ち、その外側は露胎。42は合子の蓋。ドーム状の形態で、上部平坦面には草花文を浮き彫りで表現する。体部外面は縦方向に細かい櫛描文を描く。発色の良い白色釉で、口縁端部内面は露胎。43・44は合子の身で、同一個体の可能性がある。短い蓋受けの立ち上りを持ち、その外側は露胎。底部付近も露胎である。体部外面には縦方向の浮文を表現する。釉調はつやのある灰味白色。

第12図1～10は土師質の土錘。長さは4.8cm程度のものが多いが、8は短く長さ3.6cmとなる。径は1.0～1.2cmでほぼ揃う。



第14図 上層ピット出土遺物実測図 (1/3)

11～19は滑石製の石鍋。小片となったものが多く、全体の器形をうかがえるものはない。11は口縁部で鐙状の突帯を外面に巡らせる。12は端部を欠損するが、口縁部直下の部位で鐙状の突帯を巡らせる。突帯の断面は丸みを帯びる。13～15は胴部片。外面には亀甲状に整形痕を残す。16・17は底部角の小片である。18は胴部片、19は底部片で、ともに穿孔をもつ。おそらく温石として転用されたものであろう。

第13図1～8は中世包含層出土の縄文土器。1は直立する胴部に二条の隆起線をもつもの。口縁部付近で、甌式と考えられる。2はわずかに外反する口縁部の端部外面に幅1.5cmの突帯を設け、二枚貝によるキザミを連続させるもの。内面は横方向の二枚貝条痕。3は直立する口縁部で、口縁端部上面に太い刺突を連続させ山形とするもの。外面には斜め方向に二枚貝条痕を残す。4は二枚貝条痕の調整を残す口縁部小片で、注口状の強い屈曲をもつ。5・6は第21図に示すものと同様の縄文時代後期の磨消縄文土器。5は口縁部で外反する頸部に口縁端部上

面をせり上げて側面に文様帯をつくる。6は頸部と胴部の境に縦方向の列点を連続させ、胴部は横方向の平行沈線により文様帯をつくる。7・8は同一個体と考えられるもの。いずれも内外面に二枚貝による条痕を残す。8は底部でずんぐりした胴部にわずかに上げ底の平底が伴う。

ピット出土遺物（第14図）

1はP71出土縄文土器。口縁部付近の破片かとみられ、外面に断面半球形の二条の突帯を巡らせる。上の突帯は残存がわずかで詳細がわからないが、下の突帯には側面から細い棒状工具で刺突がなされる。縄文時代後期の範疇であろう。2はP63出土の縄文土器。外反する口縁部片で、体部との境は明瞭な稜をもって屈曲する。全体に摩滅し、器面調整は不明。胎土に多くの砂粒を含む。3・4は同一個体と考えられる弥生土器壺で、ともにP30から出土した。頸部と胴部との境は不明瞭で、外面は緩やかに続き、内面はややふくらみをもつ。外面調整は摩滅のため不明であるが、内面には縦方向のミガキが観察される。

5はP79出土の土師器小皿。焼成が良く硬質だが、歪みが大きく波打った形状となる。

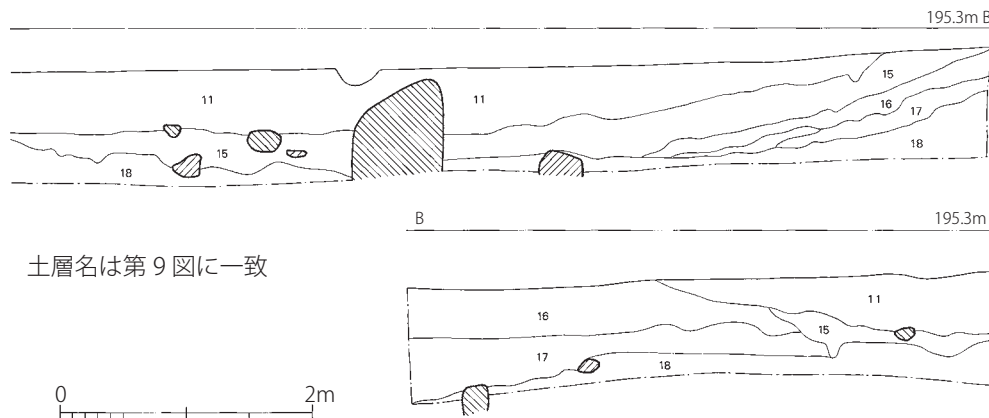
6・7は瓦器椀で、ともにP12からの出土。軟質で、軽い。内外面ともに煮炊きに用いたような有機物の汚れがあり、そのような摩滅のため器面調整は観察しがたい。

8～10は青磁碗。8は深い体部のもので、P76からの出土。内面に雲文を舞く。畳付の一部を除き全面に施釉し、発色は黄緑灰色を呈し、透明感があってつやが良い。9はP89出土の鎬蓮弁をもつもの。高台内及び畳付が露胎で、他は灰黄色の釉を掛けるが、つやの少ない発色である。10はP78出土の鎬蓮弁をもつ碗で、見込に花文を描く。高台内及び畳付が露胎で、釉調は黄灰色でつや・発色が良い。

5 縄文時代の遺構の調査

中世の包含層・遺構の調査において、縄文土器や石器が散見できること、またそれらは遺跡周辺でみられる花崗岩風化土には含まれず、黄褐色土中に含まれることから、堆積状況が良好とみられた地点に調査区を設定し、下層の調査を実施することとした（第16図）。調査区は方位に沿って南北8m、東西10mの長方形としたが、ちょうど中央部に中世包含層の調査の際に設定したベルトがあり、それより南側を1区、北側を2区として設定した。なお、2区については、西側へ調査区を2m拡張して調査を実施したが、遺物は出土しないことが確認された。

中世からの土層図（第9図）で確認すると、上層1～9の灰茶色土が中世の包含層であっ



第15図 包含層土層図②（1/60）

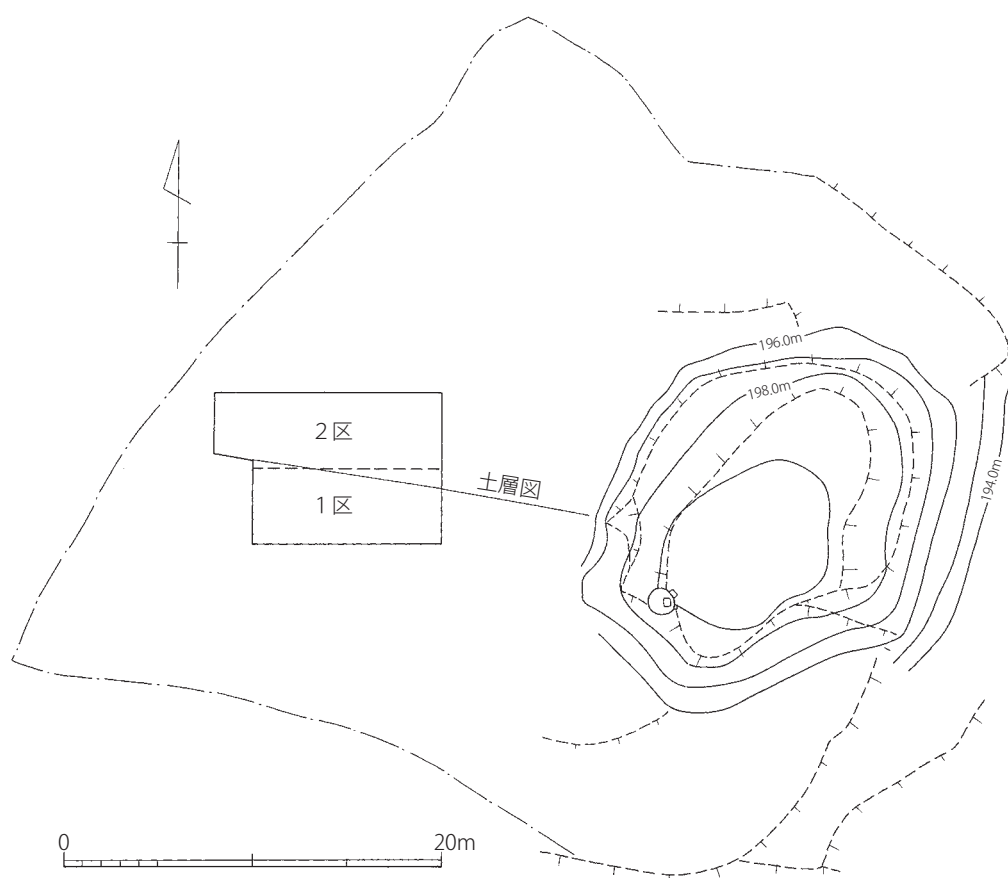
たことに對し、10・11の黄褐色土を基本とする堆積に縄文時代後期の遺物が含まれると判断された。この堆積は地形に沿って中央部が深くなるもので、その厚さは包含層中央部で約50cmを測る。その下層には12～14の茶褐色土を基本とする堆積があり、これには縄文時代早期の遺物が含まれる。この堆積も地形に沿うもので、12・13は10cm前後の比較的薄い堆積であり、14は塚側においては下層に暗茶褐色土・黒褐色土の無遺物層と並行して堆積する。調査区中央部付近では、14の下層は花崗岩の礫ないし風化土層となる。

第15図は今回の調査区の南端付近の下層土層図である。この地点は上層の中世包含層がなく、ピットも検出されなかったこともあり、表土剥ぎの段階である程度下層まで重機を用いて掘り抜いてみた場所である。精査した結果、土層番号は第9図に對應するものと観察され、11の縄文時代後期包含層と同質の堆積が確認された。しかし表土除去の際の掘削やその後の精査においても出土遺物は皆無であり、同一の堆積とはいえ遺物は調査区の中央部に集中するものと想定された。

調査は、1点ずつ位置・レベル・帰属する層位を記録しながら取り上げを行った。結果、409点の土器・石器の記録を行ったが、内訳は土器313点、石器96点とほぼ3:1の比となる。第17～19図はその分布図である。土器は●、石器は○で示した。

第17図は縄文時代包含層の遺物出土地の垂直分布図である。後期及び早期についてそれぞれの包含層の上層を中心に分布することがわかる。

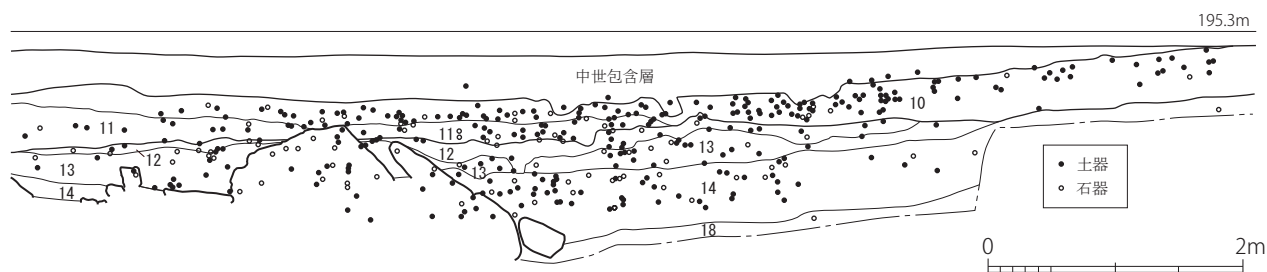
第18・19図は縄文時代包含層の遺物出土地の平面分布図である。後期（10・11層出土品）



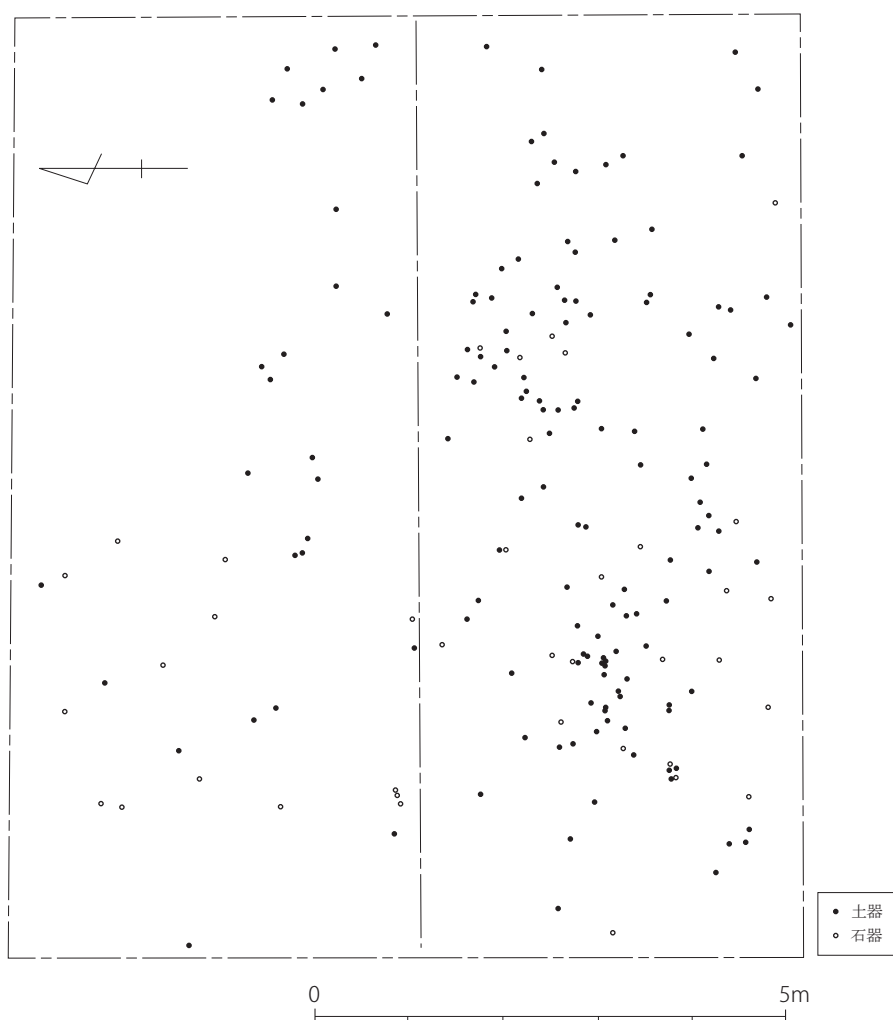
第16図 下層調査区位置図 (1/400)

と早期（12～14層）に分けて図化した。全体的にみて1区の中央付近に集中する傾向が窺われる。南側1区の南寄りでは遺物は点在する状況であり、南側に向かって包含層は薄くなると判断される。先にみた調査区南端付近のトレンチで遺物が出土しないことを裏付けるものである。なお、中央の東西方向の無遺物部はトレンチにあたる。

第18図は縄文時代早期包含層出土遺物の平面分布図である。谷地形の最も深い部分を中心に遺物が出土する傾向にある。出土土器はいずれも小片となっており、出土状況から何らかの意味を見出すのは困難と考えられた。石製品についても、製品・剥片の出土状況に有効な傾向



第17図 下層調査区出土遺物垂直分布図（1/60）



第18図 下層調査区出土遺物平面分布図（早期）（1/80）

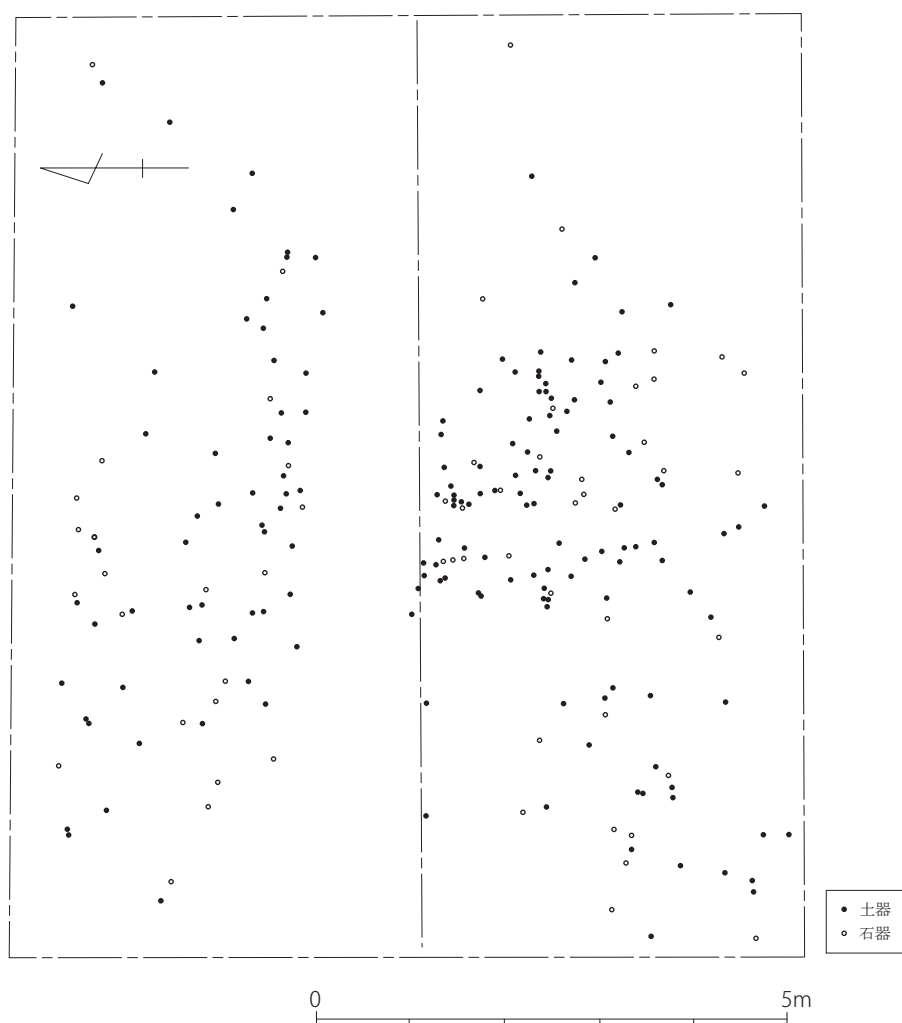
は読み取ることができない。地山面は地山に含まれる岩石が随所に露出する状況であり、遺構は確認されなかった。

第 19 図は縄文時代後期包含層の出土遺物の平面分布図である。縄文時代早期と同様の傾向を示すが、南側が希薄となる点は早期よりも顕著である。第 21 図 39 については同一個体と判断される破片がある程度集中して出土したが、他は細片となっており、出土状況に意味を持たせることができる状況は確認できなかった。また石製品についても、剥片の出土状況に意味を持たせるのは困難であった。

出土状況からは縄文時代早期・後期ともに有意義な傾向を読み取ることができなかった。谷地形の最も深い地点を中心に散布する状況といえるもので、おそらく近くにあった集落跡から流れ込んだ自然堆積であると判断できる。しかし、今回の調査後に、調査地上方の水田等で試掘調査が実施されたが、文化財は確認されていない。おそらく棚田造成時に失われてしまっているものと判断される。

出土土器（第 20 ～ 22 図）

1 ～ 29 は押型文土器。全体的に焼成が甘く、摩滅により押型文をはじめとする調整が不明瞭なものが多い。文様については、格子文が 7 で認められる以外はすべて楕円形であり、楕

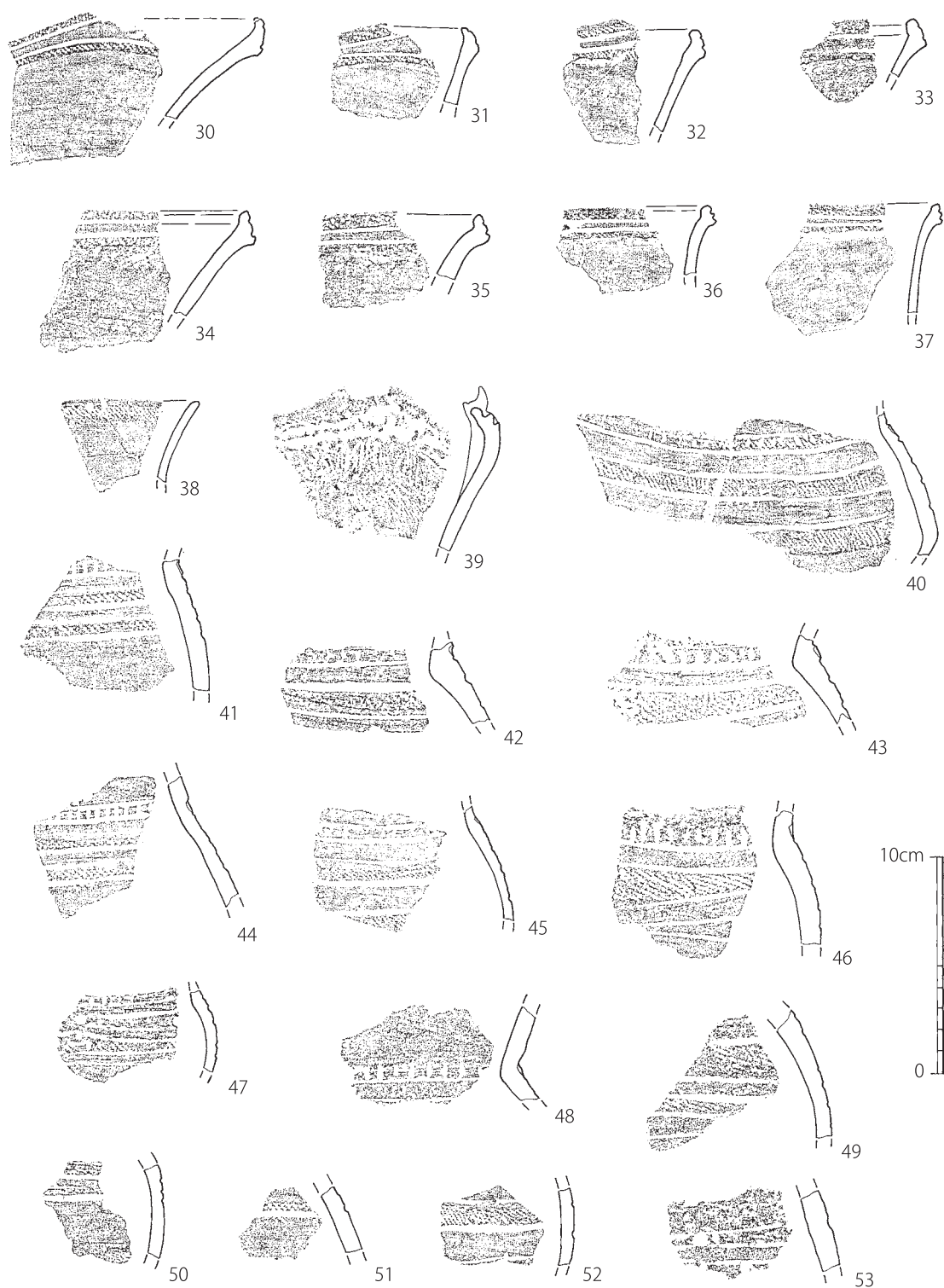


第 19 図 下層調査区出土遺物平面分布図（後期）（1/80）



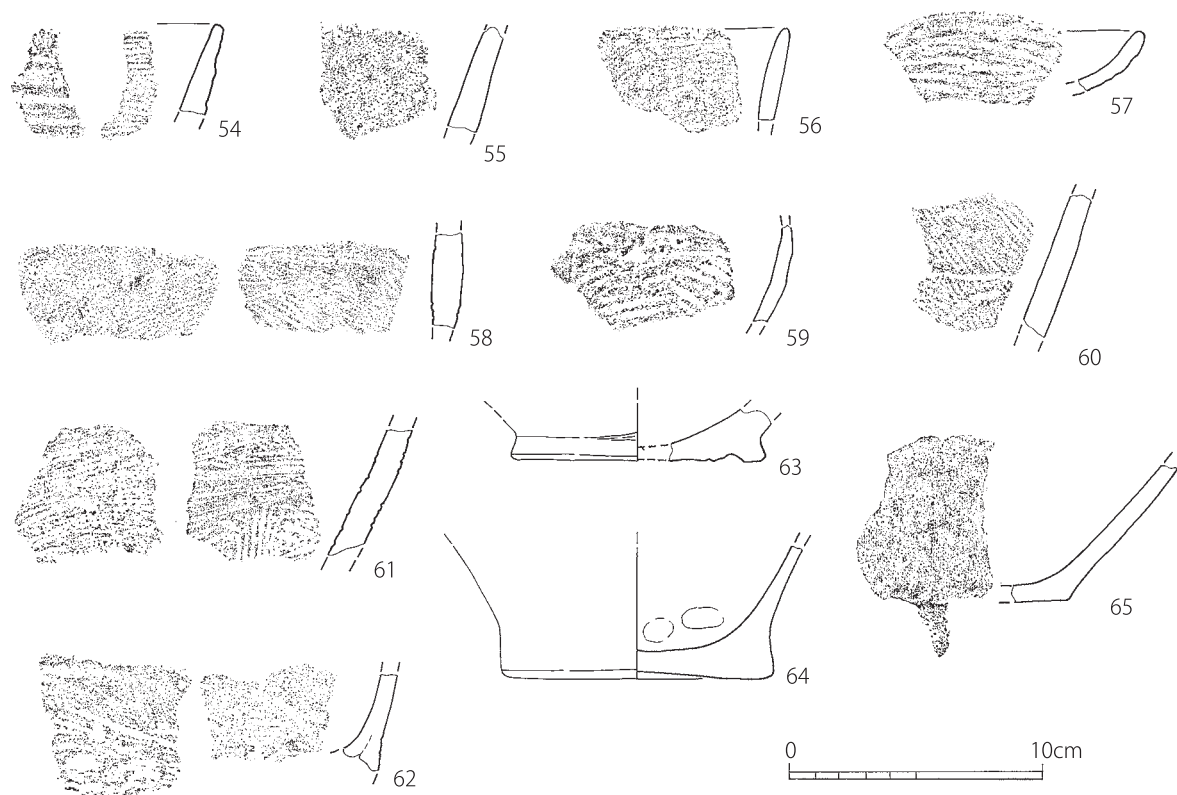
第 20 図 下層出土遺物実測図① (1/3)

円には 4mm×2mm 程度の細かなものと、6mm×3mm 程度の小型のものがある。山形文は確認されなかった。口縁部のわかる資料は少ないが、ハ字形に開く胴部がそのまま口縁部へと続き、端部は丸く収めるものである。口縁部の内面には押型文を施す。小片のため、胴部の傾きは正



第 21 図 下層出土遺物実測図② (1/3)

確には出しえないものが多いが、多くは上方に向かって開く形態と考えられる。胴部内面は外面同様の押型文以外に条痕によるものが多くみられる。比較的大形になるものも多いとみられるが、器壁の厚さは 5～7mm と薄く、厚いものでも 8mm が上限である。底部とわかる資料は確認されなかった。



第 22 図 下層出土遺物実測図③ (1/3)

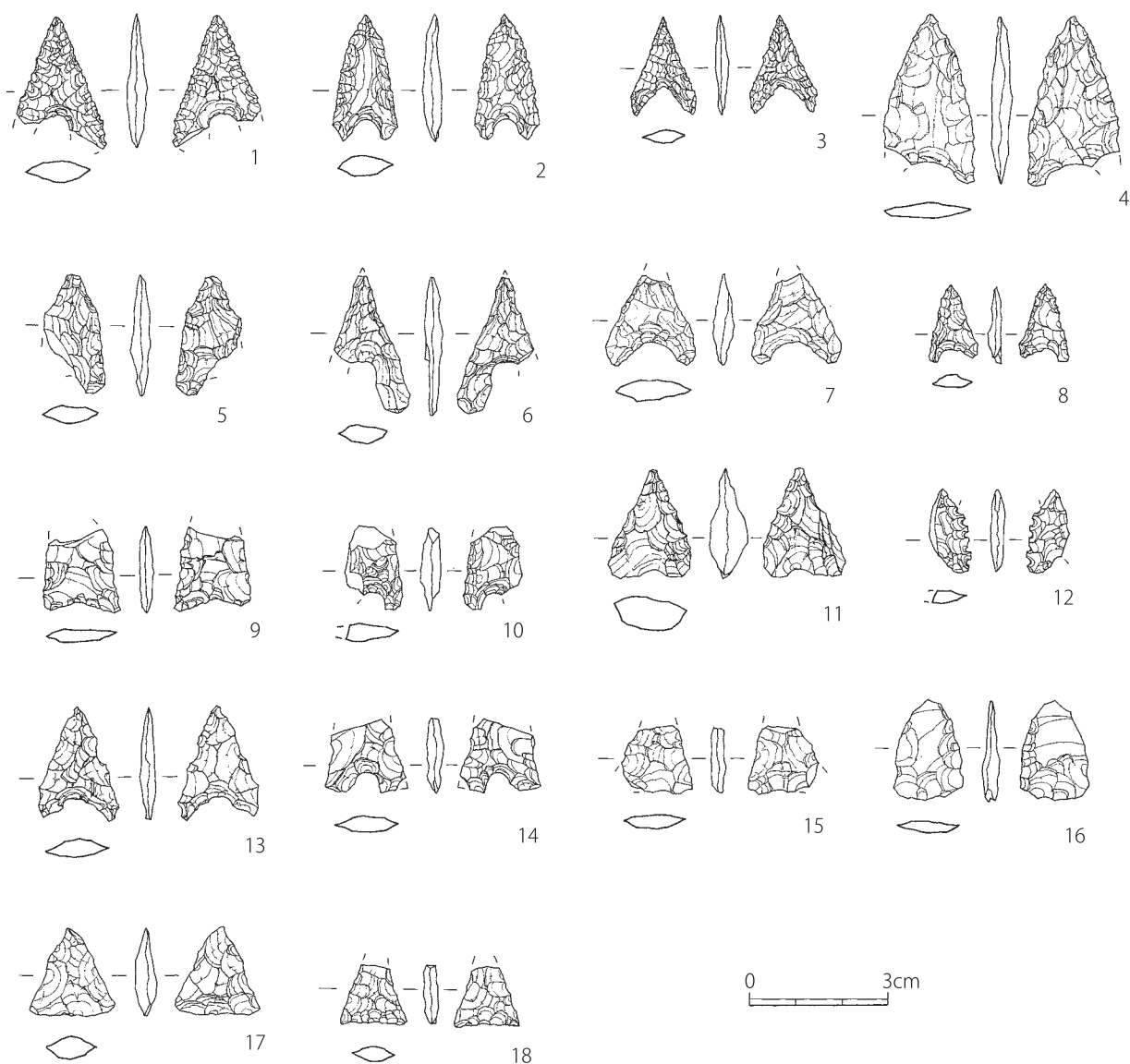
30～53 は縄文時代後期に属する精製器種。30～39 は口縁部。弧を描き大きく外反する頸部で、30～37 は口縁端部は上方へせり上げ、口縁部側面に文様帯をつくる。口縁部文様帯の幅は小型器種とみられるものは約 1.0cm、それより一回り大型の器種は約 1.4cm を測る。口縁部文様帯には縄文施文後に二条の沈線を引き、区画される中央部を磨り消す。口縁部は波状口縁となり、頂部中央は窪ませる。文様帯以外は内外面とも横方向に丁寧なミガキを施す。39 の口縁部は口縁端部を上方へせり上げるが、端部の調整にシャープさはない。口縁部の側面の文様帯は、上下二段の押し引き沈線により、波状文の凸線をつくりだす。波状口縁であり、波頂部には上面に楕円形の深い窪みをつくる。外面は二枚貝条痕を粗く残し、全体的にみて粗雑な印象を与える。この破片は図化したもの以外に同一個体と考えられる破片が複数出土している(図版 14)。38 は円弧を描きラップ形に外反する口縁部で、端部はシンプルに丸く収める。端部外面に 6mm 幅で縄文を施文し、それ以外は内外面ともに横方向のミガキにより平滑に調整する。

40～53 は胴部。頸部には列点もしくは縦長の短沈線を連続させる。縄文を施文後、列点文上位より沈線を横方向に並行させ、磨り消すことにより磨消縄文帯を交互につくる。胴部の全体がわかる資料はないが、40 は胴部最大径外面に明瞭な稜を有する。

54～65 は縄文による文様をもたない縄文土器。内外面に条痕を残すものが多いが、65 は内外面ともにミガキが観察され、第 21 図に図示した一群に伴う底部であろう。54・57 は二枚貝の貝殻条痕で、口縁端部は尖り気味につくる。63・64 は底面に径 5mm 程度の円形の圧痕が随所にみられる。

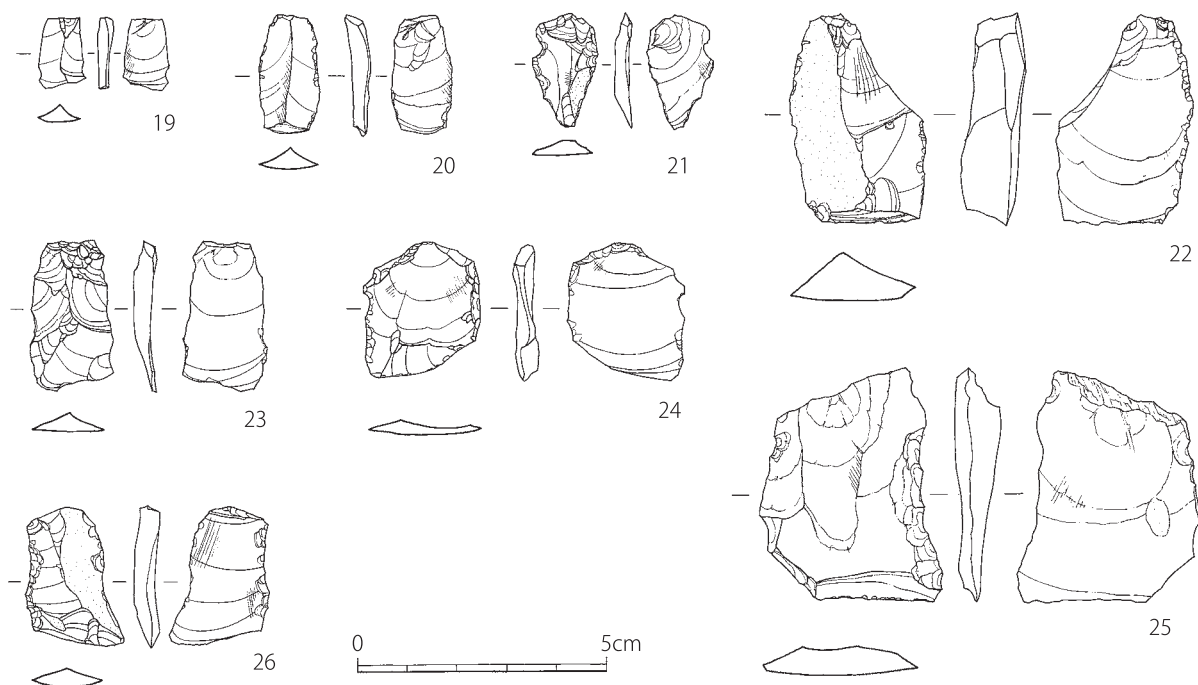
出土石器 (第 23～25 図)

1～18 は石鏃。1 は 12 層出土。黒曜石製で細かい剥離で調整する。両脚端を欠損するが、



第 23 図 出土石器実測図① (2/3)

挟りの深い形態である。2 は包含層出土。姫島産黒曜石製で、先端部は三角形で側縁は直線的にわずかに開く。3 は 12 層出土。頁岩製でやや小形。先端は鋭く、挟りは深い。4 は 13 層出土の大形品。安山岩製で風化が進む。側縁は緩やかなカーブを描く。5 は包含層出土。姫島産黒曜石製で、先端部・側縁部の形状は 2 に近似する。6 は 13 層出土で、挟りが非常に深い形態。安山岩製で、風化が著しい。7 は包含層出土。安山岩製で風化が進む。先端を欠損するが、短い形態で厚みがある。8 は姫島産黒曜石製の小形品。13 層出土。9 は 11 層出土。頁岩製で、先端を欠損するが、側縁は直線的でありあまり広がらない。挟りはごく浅い。10 は 12 層出土。黒曜石製。側縁は直線的でありあまり広がらない。11 は 12 層出土。姫島産黒曜石製で、非常に厚い形態。基部を中心にわずかしき調整しておらず、未製品かとみられる。12 は 10 層出土の鋸歯鏃。黒曜石製である。13 は 10 層出土。安山岩製で、両脚のバランスが悪い。14 は 10 層上面出土。黒曜石製で、大きい剥離により成形する。15 は 10 層上面出土。安山岩製で、浅い挟りの形態。16 は姫島産黒曜石製の剥片鏃。10 層出土。17・18 はともに 10 層出



第 24 図 出土石器実測図② (2/3)

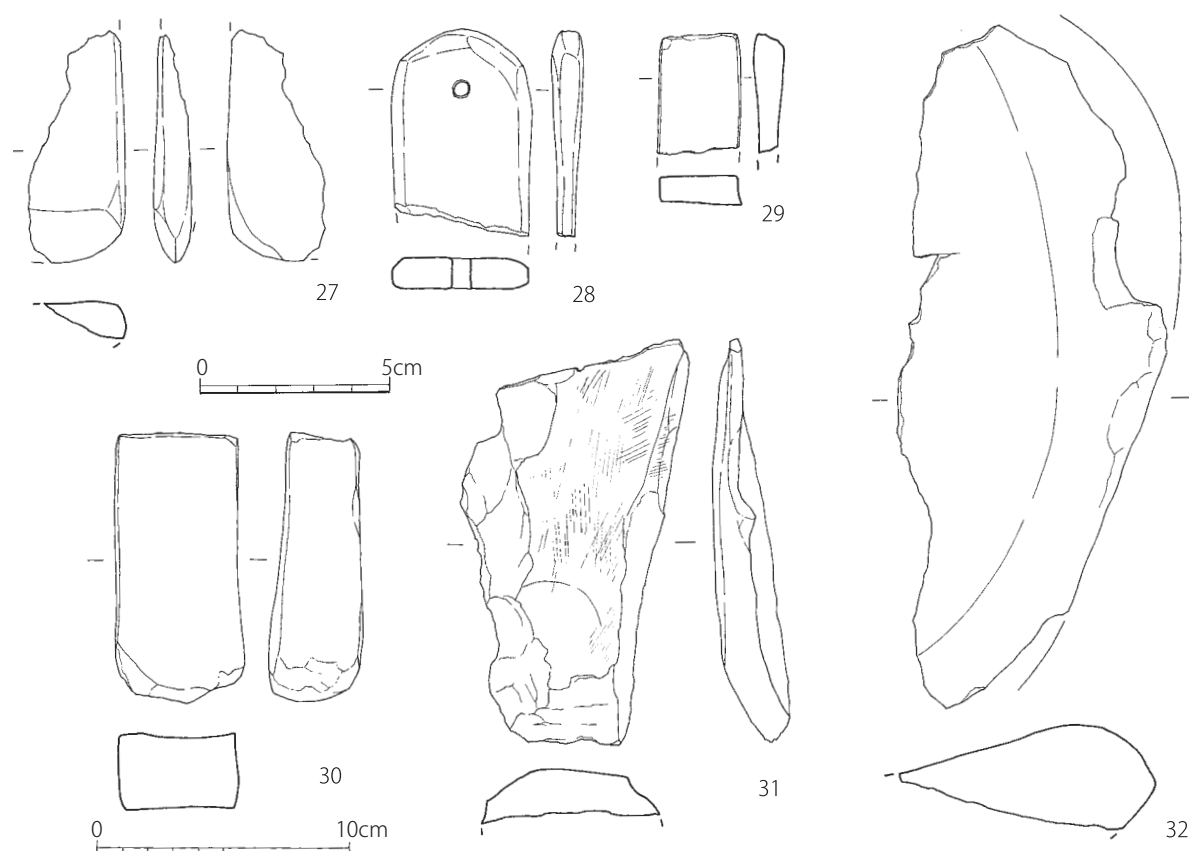
土の平基式鏃。安山岩製で、大きい剥離で成形する。

19～25 は縦長剥片で、整形はほとんどなされないが、使用痕が認められるもの。19 は姫島産黒曜石製で 13 層出土。細石刃状の形態をなす小形品。20 は黒曜石製で 11 層出土。両側縁に使用痕が観察される。21 は中世包含層の出土品。黒曜石製で三角形の形状をなす部分に使用痕が観察される。22 は 12 層出土。黒曜石製で、自然面を残す不整形の剥片であるが、直線的な部位に使用痕が観察される。23 は P66 出土で、黒曜石製。両側縁に部分的に使用痕を残す。24 は 13 層出土。黒曜石製で、やや不整形な方形剥片の周囲に使用痕が観察される。25 は 12 層出土。安山岩の剥片で、図の右側縁は整形したものとみられる。26 は中世包含層出土の黒曜石製で、側縁に使用痕が比較的多く観察される。

27 は中世包含層から出土した磨製石斧。蛇紋岩製で、欠損が多いが、厚さ 1cm 強の薄手のつくりと判断される。刃部は使用により小刻みに欠損する。28 は厚さ 0.9cm、幅 3.8cm の扁平な棒状の石製品。頂部は山形に整形され、径 4mm の穿孔がまっすぐに設けられる。穿孔の角はシャープで、紐等による擦れは認めにくい。全体を丁寧に磨いてつくるが、砥石のような質感ではない。中世の包含層からの出土であり、時期を詳らかにできないが、縄文時代の装身具の可能性はある。

29～31 は砥石。いずれも中世の包含層から出土したものであり、時期は中世の可能性も残す。29 は肌理が細かい砂岩製の仕上げ砥石。30 はやや粗い砂岩であり、欠損後も使用したために割れ口が丸みを帯びる。31 は輝緑凝灰岩製で、剥離状の欠失が多い。

32 は台石の破片で、玄武岩とみられる。上面は使用により大きく窪み、平滑となる。側面は凹凸が多い。



第 25 図 出土石器実測図③ (1/3、27・28 は 1/2)

IV おわりに

縄文時代については、早期および後期の包含層が確認され、ある程度まとまった量の土器と石器が出土した。しかし遺構は検出されず、遺物の出土状況からも有意義な傾向を読み取ることができなかった。ただ、それぞれの層位から出土する縄文土器は、大きな形態差があるわけではなく、時期的にまとまりのある資料であると判断できる。

これまでの伊良原ダム建設に係る発掘調査において、堆積土の科学的な分析が実施され、年代観等が導き出されている。今回の調査区において検出された黄褐色土は、これまでの調査成果を参考にすると、アカホヤ火山灰の二次堆積と判断される。

縄文早期については黄褐色土層の下層より押型文土器の出土が確認された。これまでの調査でも本遺跡の下流に位置する上高屋台ノ原遺跡や、上流に位置する上伊良原榎遺跡で比較的多くの資料が出土しており、比較検討できる資料が増えたものと評価できる。同一形式の中でどれだけの時期差があるのか問題は残すものの、祓川に沿った各小平野で縄文時代早期の遺跡が展開する状況がうかがわれる。遺物量が他地区に比べ少ないことが影響するかもしれないが、比較的施文のバリエーションが少ない点は指摘されよう。

黄褐色土層から出土した土器は、口縁部形態や胴部文様の特征から、縄文時代後期中葉から後葉にかけての太郎迫式に位置づけられる。この形式については、これまでの伊良原ダム建設に係る発掘調査ではまとまった資料は得られておらず、貴重な成果となった。伊良原という一

つの谷において、土器変遷の空白を埋めるものとして重要である。また同形式やそれに近い形式の資料は、近隣では上毛町土佐井遺跡や築上町松丸遺跡などで出土している。これらとの対比により、京築地域の縄文時代後期の土器の特色が明瞭となり、地域史を検討する上での有意義な尺度となるものと期待される。

中世については、調査前から塚の評価が注目されたが、調査の結果、塚は人為的な造作は認められず、上部平坦面にも遺構は確認されなかった。塚周囲の水田面に縄文時代の遺物包含層が形成されていることから、自然の作用で塚状の地形が形成されたものと判断される。塚上に存在する石塔群についても、関連する遺構は検出されず、それらの由来は不明と言わざるを得ない。頂部が削平されている可能性はあるが、積極的に塚が信仰の対象となっていたとは言い難い。しかしながら、眺望の良い小高い塚という環境は利用価値が高いはずであり、全く利用されていないと断言することは躊躇される。

塚の周辺には、中世の遺物包含層がひろがっており、出土土師器の形態等から 13 世紀を中心とするものであることが確認された。また、中世のピット群が検出されたが、建物跡や土坑等の、性格を想定できる遺構は検出されなかった。しかし、一般集落にはみられないような、優品というべき白磁が出土することからも、何らかの特殊な環境があったことを想起させる。塚の存在とあわせて考えると、自然地形とはいえ塚をシンボルとした何らかの施設が存在した可能性は、山岳信仰が盛んであった当地域において至極自然なことだったのではないかと考えられる。

版 图



1. 遺跡遠景
(西上空から)



2. 遺跡遠景
(東上空から)





1. 遺跡遠景
(北上空から)



1. 遺跡遠景
(南上空から)

1. 遺跡遠景
(東、祓川右岸から)



2. 遺跡調査前全景
(西から)



3. 遺跡全景
(昭和 50 年)





1. 遺跡全景
(上空から、左下が北)

2. 塚上地山検出状況
(北東から)



1. 塚西トレンチ（北西から）



2. 塚北トレンチ（北から）



3. 塚東トレンチ（南東から）



1. 塚南トレンチ（南から）



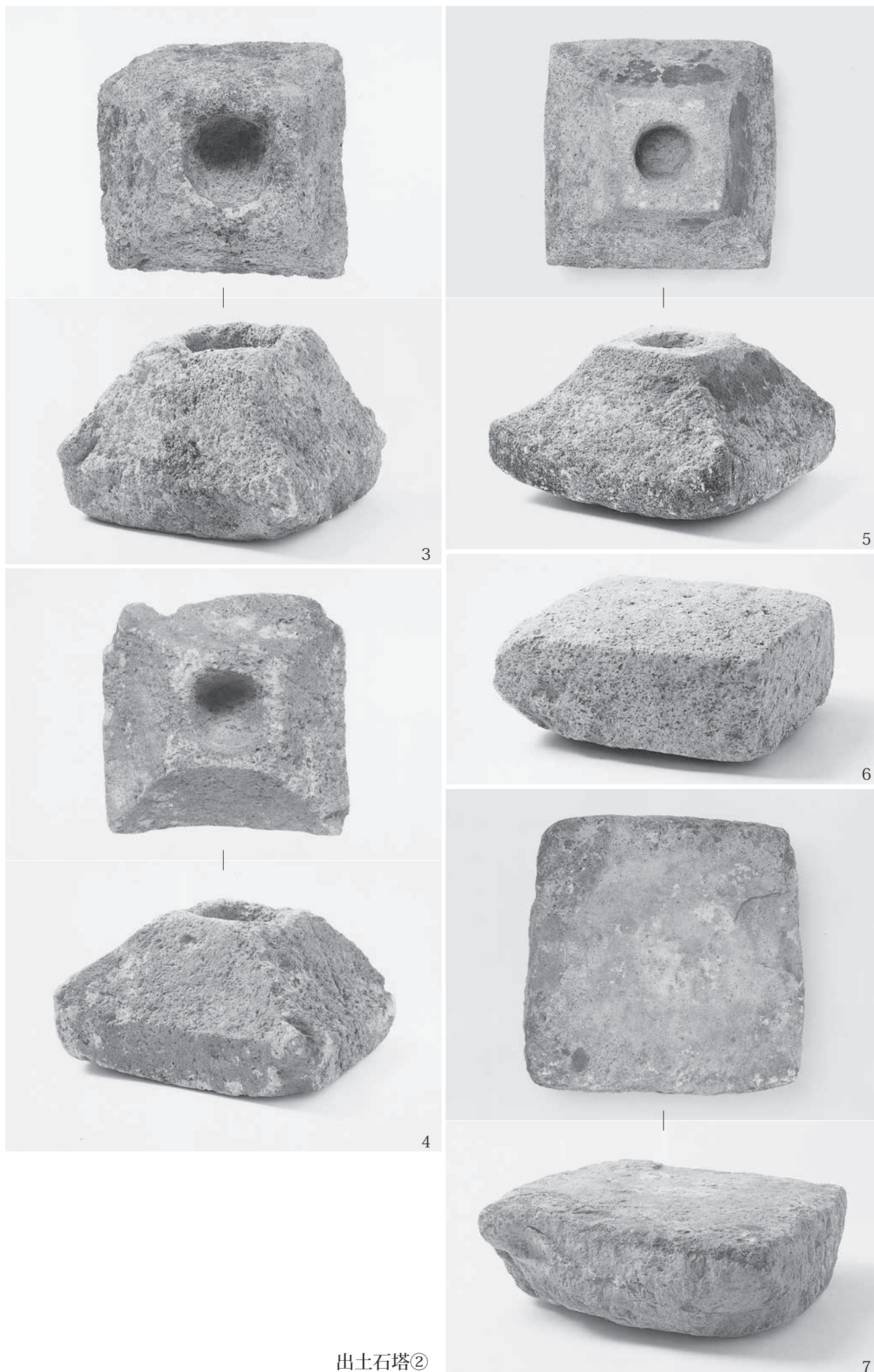
1. 塚上石塔群
(東から)



2. 塚上石塔群



3. 出土石塔①



出土石塔②



1. 上層遺構検出状況
(北西から)



2. 上層遺構検出状況
(北から)



3. 上層遺構検出状況
(東から)

1. 包含層堆積状況
(B - B' 断面)



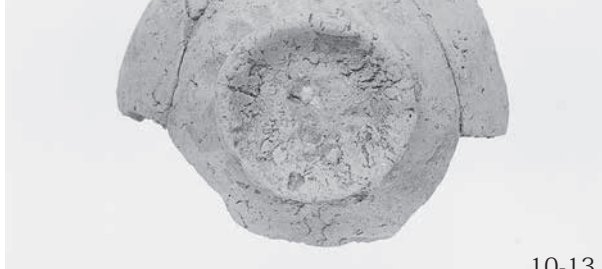
2. 下層調査区全景
(東から)



3. 下層調査区2区
(北から)



图版 10



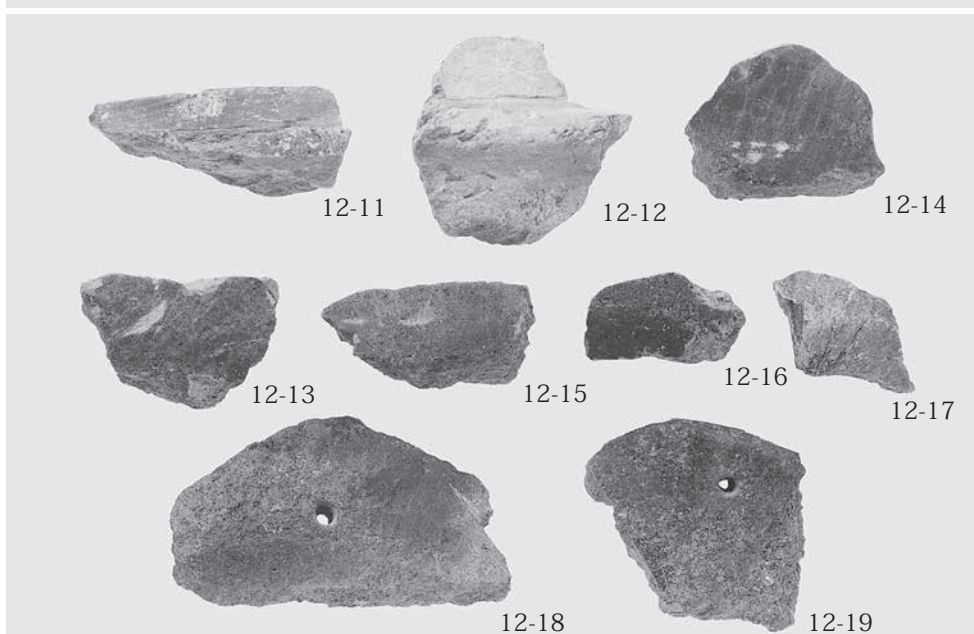
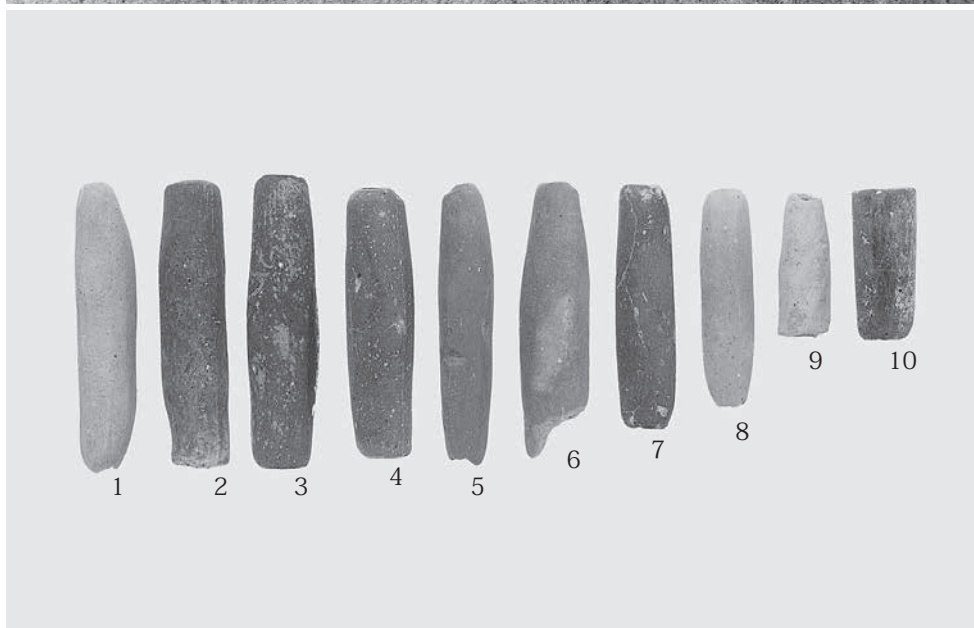
出土遺物①



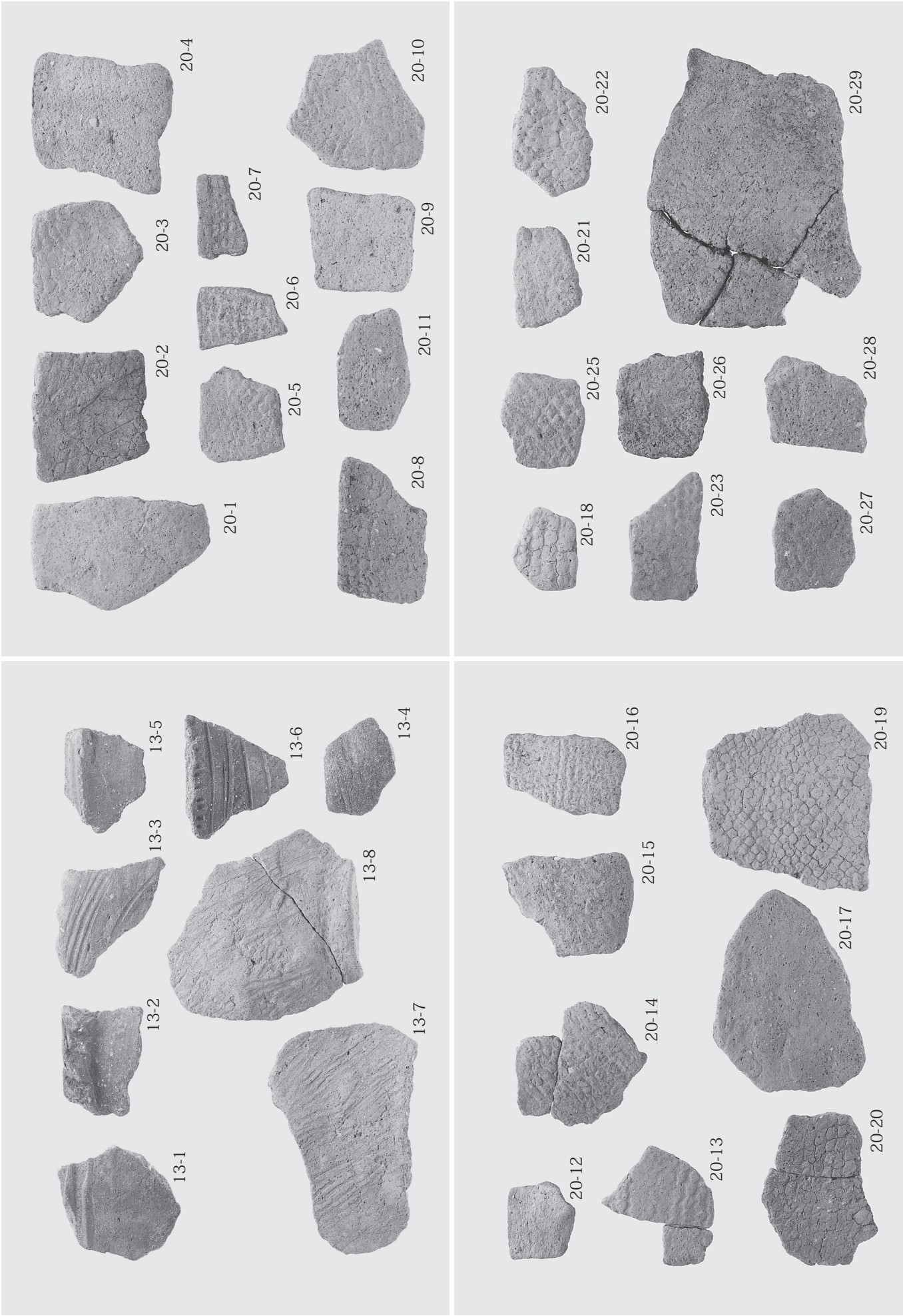
出土遺物②



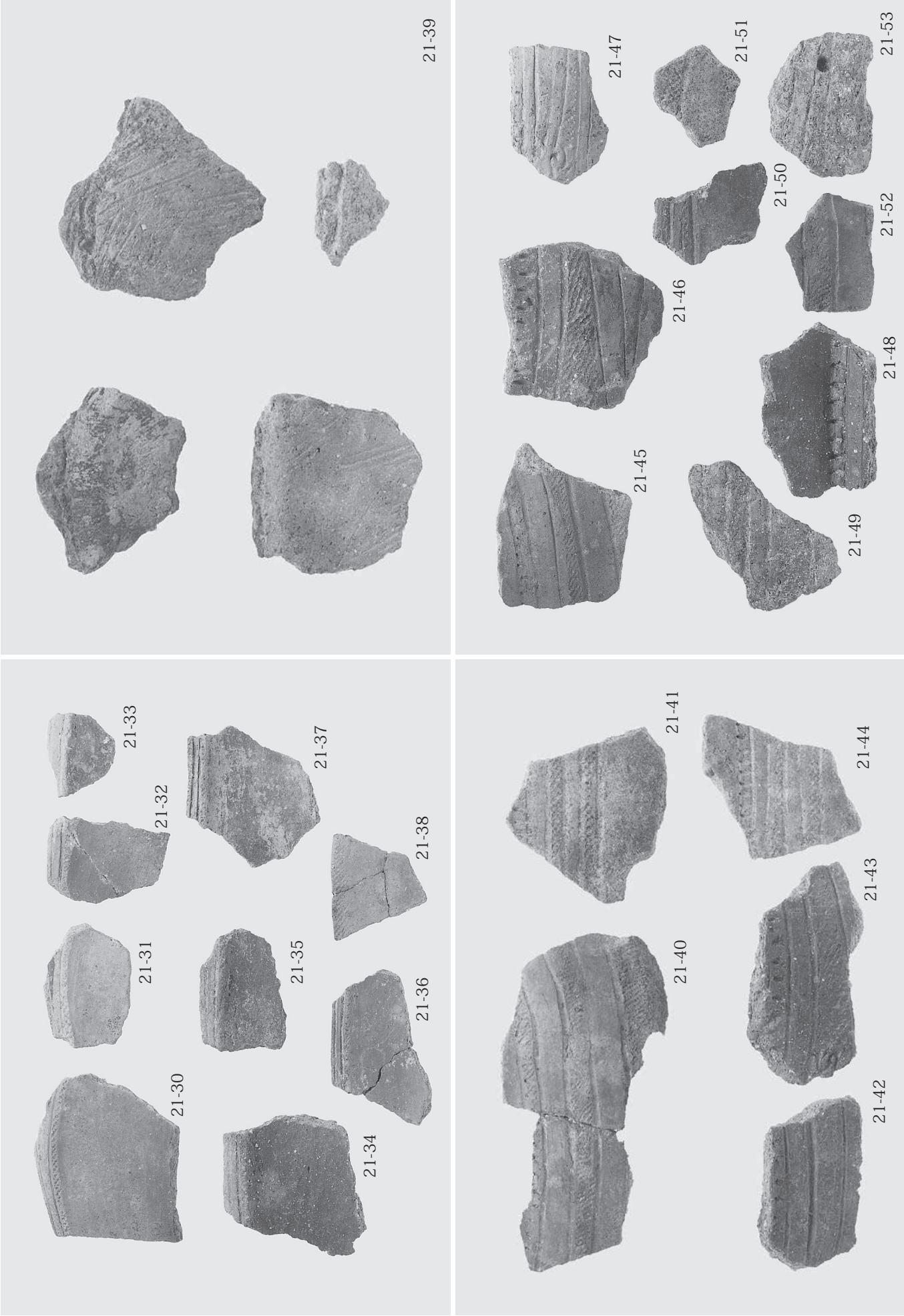
1. ピット青磁出土状況



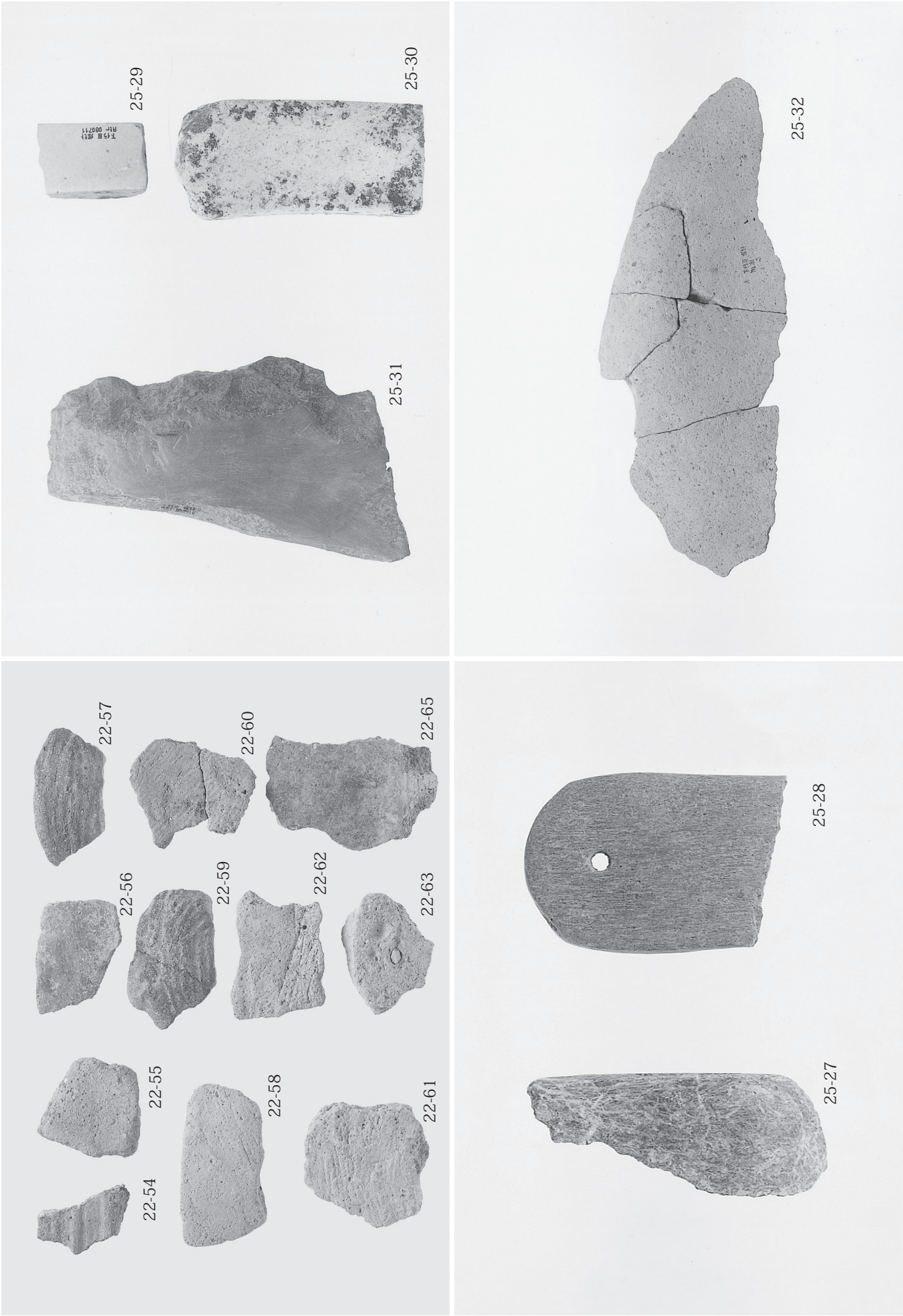
出土遺物③



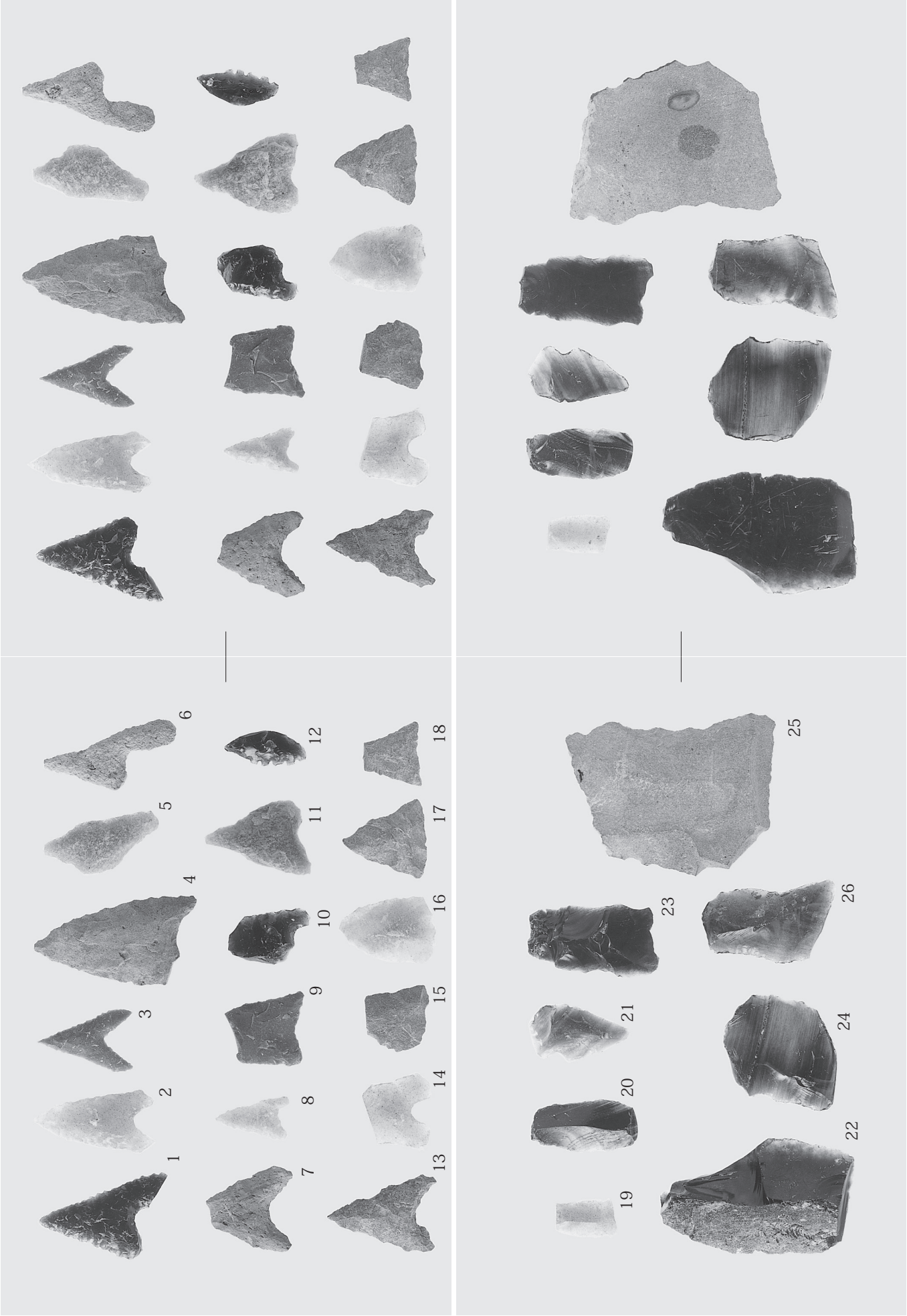
出土遺物④



出土遺物⑤



出土遺物⑥



出土遺物⑦

報 告 書 抄 録

ふ り が な	いらはら							
書 名	伊良原Ⅲ							
副 書 名	伊良原ダム関係埋蔵文化財調査報告書－ 3 －							
シ リ ー ズ 名	福岡県文化財調査報告書							
シ リ ー ズ 番 号	第232集							
編 著 者 名	岸本 圭（編）							
編 集 機 関	九州歴史資料館							
所 在 地	〒838-0106 福岡県小郡市三沢5208-3							
発 行 年 月 日	2012年3月31日							
ふ り が な 所 収 遺 跡 名	ふ り が な 所 在 地	コード		北 経 。 ' "	東 経 。 ' "	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
しもいらはらつかもといせき 下伊良原塚本遺跡	ふくおかけんみやこぐん 福 岡 県 京 都 郡 みやこまちさいかわしもいら みやこ町犀川下伊原	40625	910254	33° 33′ 44″	130° 57′ 05″	2008.6.10 ～ 2008.11.27	500	ダム建設
所 収 遺 跡 名	所収遺跡名	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
下伊良原塚本遺跡	集落	縄文・中世		ピット		縄文土器 中世陶磁器		
要 約	下伊良原塚本遺跡は、石塔群が存在する古墳状の塚があり、古くから知られていたものであるが、塚は人為的なものではなく自然地形であることが判明した。中世に関しては性格の判明する遺構は検出されなかったが、白磁や青磁に優品が含まれる傾向にある。縄文時代に関しては、縄文時代早期および後期の包含層が検出された。縄文時代早期は押型文土器・石器が、縄文時代後期は太郎迫式土器・石器がみられる。							

福岡県行政資料	
分類番号	所属コード
JH	2117104
登録年度	登録番号
23	0006

伊 良 原 Ⅲ

福岡県文化財調査報告書第232集

平成24年3月31日

発行 九州歴史資料館
福岡県小都市三沢 5208-3

印刷 片山印刷有限会社
福岡県小都市祇園 1 丁目 8-15

